おいでませ、ねとげの世界へ。

Kei

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
おいでませ、ねとげの世界へ。

【Ｎコード】
Ｎ９３９７Ｔ

【作者名】
Ｋｅｉ

【あらすじ】
１０年間やり続けてきたＭＭＯＲＰＧの超大型アップデート。
そして遂にあの大台に足を踏み入れた。
何時も通り綺麗なお姉さんキャラでいくぜと張り切ってみたものの……。
心は男子、身体はないすばでぃなお姉さん、行動はアホの娘な主人公が繰り広げる鍛冶ライフ！

序章：始まりの鼓動（前書き）

初投稿になります。
良く在るような、古き良き時代の作品になります。

序章：始まりの鼓動

「ついに、ついにきたか……！」

机の上に設置してあるモニターが映す情報。

感極まった俺は、椅子を蹴倒すように立ち上がり、万感の思いを込めて拳を握り絞める。

［Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ］

この世に氾濫し尽くしたネットゲームの人気カテゴリ、ＭＭＯＲＰＧ。

その中の一つ、完全分業型ＭＭＯＲＰＧと銘打たれたこのシリーズは予想に反して、とんでもない売り上げを叩き出した。

なにしろ、第一に「戦闘職」と「生産職」。

さらには、戦闘系は魔法系、遠距離系、近接系などなど。

生産系は花形の「調理」「錬金術」「鍛冶」から「建築」「ギルド運営」なんてものまで多岐に渡っている。

しかし、此所で勘違いしてもらわないで頂きたいのは、

「全て別のソフト」

であることだ。

なんだそりゃ、と云われても仕方のないくらい　［Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ］　のソフトの数は、とんでもないことにな

っていたりする。
つまり、いわゆるＭＭＯＲＰＧの「魔法使い」「剣士」「鍛冶士」などのカテゴリー毎に。
いわゆるＭＭＯＲＰＧ一本分の情報量をつぎこんで、それぞれを独立したソフト化させたのだ。
結果、一つ一つがとんでもない自由度と、圧倒的なグラフィック、操作性、リアリティを兼ね備えた化け物ゲームとなった。

でもそれじゃあ造った武器とかどうすんの？手に入れたアイテムは？
そういった声が聞こえるだろう。
そこで、分業である。
このゲームはソフト一本買うと必ず、ハーバーリンクスと云われるサーバーへのアクセス権が手に入る。
そこは、全ての者が集う場所。
全ての楽園。
そこにおいてのみ、他のカテゴリのユーザー達と交流が図れるのだ。
此所がこのゲーム最大のキモなのだが、何故無料で使えるのかは［Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ］　十二不思議に入っていたりする。

ただし、ダンジョンやモンスター出現エリア、鉱山、草原、海域、等全てのフィールドエリアはない。
ハーバーリンクスにて可能なのは他ソフトのユーザー同士の交流、他ソフトに無い材料、アイテムの取引が出来る事だけである。
他のソフトの世界に行けないんじゃ意味ねーよ。
そんなユーザーの批判も多かった。
それも、始まるまでの話。
ソフト一本だけでも、職業の幅の広さ、エリアの広大さ、出現モ

ンスターの数、どれをとっても圧巻だったからだ。
ぐうの音も出ないその完成度にユーザーは納得した。
開発から既に１０年。未だにソフト一本ですら極める事が出来たユーザーは居ないとまで言われた「Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ」シリーズ。

その［Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ］を創ったＳｏｌｄｅｒｔ社が満を持して、遂に全ゲームユーザーの夢と言っても過言ではないあのシステムを礎にした。

［Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ］のシリーズ統一ＶＲ化

震えが止まらなかった。
始めは只のキチガイな、頭のネジがぶっ飛んだゲームメーカーだった。
それが今じゃ、全世界を牛耳る最大のスポンサー企業。
そこの今も変わらぬ、もはやあんたらどんだけだと言いたくなる勇者（マッド）達。
いつかはやってくれるんじゃないかと思っていた。
「夢じゃない、よな？こんな、こんな事が現実に起きるなんて……

……」

俺こと、風見（かざみ）剛太郎（ごうたろう）も［Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ］に魅せられたユーザーの一人であった。

開発初期からこの訳のわからなさが逆に面白いんじゃね？

なんて、冗談半分でベータテストからやり始め、その造りの異常さに、その世界観の広大さにどっぷりとはまり込んだ。

気が付けば、古参も古参、最古参の部類に入っていたりするのだから恐ろしい。

ふと、今までの事を思い出す。

徹底的な魔界造武器を創るとかいって無駄に最高ランクの鉱石を使いまくったり。

なのに出来たのは初期装備とほとんど変わらない出来のものだったり。

あれは、ひどかった。

皆がマジ切れしてたしなぁ。

あまりに酷い出来だったので、第一線を走っているユーザーに装備させてボスモンスターに突っ込ませたりしてたな。

いつも冷静なあいつの怒り狂った様のといったら、もうお察し下さいとしかいいようがない。因みに後悔は微塵もしていない。

まぁ、それもこれも良い思い出だ。

もうＶＲ化に向けてゲームは一時中断状態になっている。

次に彼等と会うのはＶＲでの［Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ］だ。

「うわ、もうこんな時間かよ。バイト行かなきゃ！」

VR［Master of Artist］ログインまで、
あと一週間

序章：始まりの鼓動（後書き）

はじめまして、Ｋｅｉと申します。
作品として久々に書いてみたので、色々おかしいところがあるかとは思いますが、
生暖かい眼で見守っていただけたら幸いです。
とりあえず次らへんまではちょっとした設定やキャラの小出しが続きます。

序章：始まりの鼓動２（前書き）

夜中にこっそりこんばんわ。
では、続きです。

序章：始まりの鼓動２

日本に留まらず世界で空前の大ヒットを記録したＭＭＯＲＰＧ
［Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ］
このゲームは他のユーザー、つまり人との関わりが割と大切だったりする。
なぜならば、店、と言われるものがほぼ皆無だからだ。
在るのは果物屋や一部の食料関係の店だけ。当然武器屋なんてものは無い。
装備は初期装備を除いて、特別なイベント以外では手に入らない。
ようするに他のソフトユーザー、生産職の人から都合してくるなり、材料を渡して作ってもらうなりするしかないのだ。
［Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ］　が社会的に摘発されなかったのは、ここの所が大きいと俺は思っている。
武器を新調しようにも店がない。自然他のユーザーに作ってもらうしかないので、話しかけなければいけない。
当たり前といえばそうなのだが、ネットゲームというものは広いようで人の環は狭いものだったりする。
中には、誰にも話しかけないでソロプレイをする者もざらにいる。
その点において、［Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ］　は社交性というものがなくなりはしない。個人差はもちろんあるにしても。
必然的に人の環は今迄のゲームより格段に広くつながって行く。
全くもって良く考えられたものだ。

「見たか」

もう三年間は通っている、見慣れた風景。
瀟酒な言い方をするのならばキャンパスと呼ばれる学院の通りの広場にて俺は一人の友人と顔を突き合わせていた。

「当然、私を誰だと思っているのかね」

いつも通りの傲岸不遜な表情にシニカルな笑みを浮かべた友人は、愚問だと胸を張る。
こいつの名前は立花（たちばな）　朽巴（くちは）。
世間一般で言うところの腐れ縁というやつだったりする。
中学から大学の現在に至るまで、全学年同じ教室、学部だったりする筋金入りだ。
ただ、残念ながら思春期らしいキャッキャウフフな関係では無い事を此所に書いておこう。
キャッキャウフフな関係では無いのだ。

「キャラ、一から造り直しらしいね」

「だな、幸いにして優先的に参加出来るらしいが……お前はどうすんだ？」

「私かい？決まっているじゃないか。」

「やっぱりアレか」

「人の事を言えるのかい？君だって毎度毎度まぁ……」

「べつにいいじゃねぇか、女キャラだって！」

そう、俺はこの手のゲームでは必ず女性キャラを使ってプレイしている。

特に、女性になりたいとかそういうんじゃない。

単純にむさ苦しい男を使うより、綺麗なお姉さんを動かす方が眼にやさしいからである。

いいよね、酒場の女主人って。

〇〇ーダさんは俺の嫁。文句は言わせん。

「やれやれ、相変わらずの変態ぶりだね。そんなことだから君は……」

「お前にだけは言われたくない。ショタキャラのハーレムマスターが」

そしてこいつは、ショタ、可愛らしい男の子を毎回使っている。

しかも、びっくりな事に美女美少女、果ては美幼女まで囲っているのである。

なんとも、うらや……もとい、けしからん奴なのである。

う、羨ましくなんてないんだからね！！？

「奇声を上げないように、空気が汚れる」

「痛っ！？まてまてまてまて、それはシャレにならん、が、っぎっgじじじぇいおｗｊｆｋｄｋｌｓじゃｖｄｈさほｄｈｗくぇ？！」

この細腕のどこにこんな力があるのか。
メキリと頭蓋骨が軋みを上げる音が響く。
わずか5秒でタップした俺は、決してひ弱ではない。……
…ないのである。

「で、今日はいくつ供物が届いたんだ？」

「……5つだ」

俺の台詞に、少しだけ困った様な複雑そうな表情で答える朽巴。
遺憾な事なのだが。
黙っていればこいつは超絶な美人だったりするのだ。
ぱっちり開いた二重まぶた、爪楊枝でも乗っかりそうな長いまつげ、綺麗なカーブを描いた眉、腰までストレートに下ろした艶やかな黒髪、無駄のない引き締まったスタイル、身長だって俺より高い……。
どこぞのご令嬢も真っ青な出で立ちである。
まぁ、唯一胸がさび……

「……何か考えたかね？」

ドスの効いた声が聞こえる。主に前方から。
何故ばれたし！？
いや、落ち着けここは冷静に。

「なんでもありません！サー！！」

「……」

「……」

「はぁ、まあいい。君というやつは……」

諦めたように溜め息をつきながら持っていた収納力の高そうな、物を詰め込むのに丁度いいバックに貢ぎ物を無造作に入れてゆく朽巴。

どうやら、なかったことにしたらしい。

にしても毎度毎度よくもまぁ……。

某高級ブランドバックから、菓子、果てはキワドい下着なんてのもあるらしいのだから、こいつの人気ぶりが伺える。

というか、下着って。贈ったやつの将来が不安なのだが。

そんな学内では「女王」、「黒髪姫」、「全一女神」等と言われているこいつだが、俺からしたらただの変人に過ぎない。

ショタキャラ使いのハーレムマスターなんて奇特なプレイスタイルの悪友。

男だけでなく女にもモテテ、お姉様だなんていわれているこいつは。

「リア充もげろ」

おっと、つい本音が。

「君ぐらいなものだよ。私にそんなことを言うのは」

「褒めるなよ。まったく」

「褒めてない」

まぁ、こんなアホらしい会話が出来るくらいにはお互い悪くない付き合いができていると思っている。

兎に角。

俺達、否。全世界の［Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ］ユーザーは確実に浮き足だっていた。

長い［Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ］の歴史に革新の日が訪れるのもすぐ先の事。

ＶＲ［Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ］正式稼働まで残り３日

序章：始まりの鼓動２（後書き）

というわけで、二人目の人物登場です。
ミステリアスな朽巴さんが物語にどう関わっていくのか。
そして、主人公との恋愛シーンはあるのか！？
そろそろ、ファンタジーな成分を次回に。
ではまた。

第1話：ログイン（前書き）

やっと、ファンタジー成分が出てきます。

第1話：ログイン

幾多の枝葉は今、土へと還り一つの芽を新たに吹く。

次なる舞台は完全なる異界。
栄光も富も飢えも。
全てを掴むも、全てを満たすも自分次第。
新たなる旅路への準備は整った。
大いなる高みへと、再び。

VR［Master of Artist］

Solder社

〈第1話：ログイン〉

「んぅ……」

夢を見ていた。
見渡す限りの草原。
色とりどりの草花。
鍛え上げた肉厚な筋肉。
吹き抜ける様な青空。
その青空の元、少量の雲が楽しげに空を泳いでいる。
草原の中心には無駄なもの一つ纏わぬ、凛々しくも年月を感じる存在が。
たくわえた髭は美しく、なでつけた頭髪は光を反射しきらきらつやつやぬるぬると、

「そんなんありえんわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

後の俺の黒歴史一ページ目を飾る素敵で最悪な目覚め。
風見　剛太郎こと、エディナが　ＶＲ［Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ］　で初めて言葉を発した瞬間であった。

「此所は……てそうか俺確かログインしたんだったな」
眼前には広大な湖が広がっている。
水は透き通るように青く澄んでいた。
周りは木々に覆われ、まさにお伽噺（ファンタジー）といった風景が広がっていた。

「おおぅ、ファンタジーっぽい。本当に俺は来たんだな……
…」
なんともいえない感慨に浸る。
よし、先ず始めにする事は。

「自分の姿確認だな」
やっぱり気になるよね。
うむ、と頷き歩みを進める。
が、何故かよたよたとした歩きになってしまった。
なんか重心が前の方に傾いているというか、これは要訓練だな。
歩くだけでこれじゃ話にならん。
さてさて、いったいどうなっているかな？

「うぉお……」

一言でいうなら予想以上だった。

少々鋭めの眼、きりっとした眉、シャープだが女性らしい柔らかさを保った面立ち。

薄めのそれでいてふっくらした唇、眼の下の涙ぼくろがセクシーさを演出。

なかなかに自己主張する二つの膨らみ、腰回りはきゅっと締まったかのように細い。

身長は現実での自分とさほど、すみません嘘つきました。自分より高めの１７０センチ半ば程。

さらりと、流れる銀絹のような腰までの銀髪。

初期装備らしい、革の鎧を身に纏ったとんでもない美女。

俺が一周間念入りに創り上げたキャラ。

エディナが水面に映っていた。

「はっ……！い、いかんいかん！」

自分で自分の姿に見入るなんてナルシストもいいとこだ。

俺自重、俺自重と自分を諌める。

「それにしても良く出来たもんだな」

ふと、湖の水面に手をつけてみる。春先なのか少しきりりとした冷たさが指先を伝わっていく。

時折、吹く風も髪をさわさわと揺らしていく感触も。

日向の暖かさも。

現実の世界とまるで変わらない。

此所が俺達の、俺の夢の先（新天地）。

「はぁ、……凄げぇなあ」

「まぁ口調は変えなくてもいい、よな？」

一頻り、完成度の高さに驚嘆した後。
いつまでも此所にいてもしょうがないので、この場を離れることに。
さて、身体は女性になっているのだが。
どの道これはゲームだ。交流があるのは同じプレイヤーだろう。
別に俺はナリキリといわれるロール（演技派）プレイヤーではないので口調にこだわる事もない。
まぁ、それにこの容姿なら男の口調でもそんなに違和感はないだろう。
声自体はなんというか、自分ではいまいちわからない。
ただ、やはり女のそれなんだろうとは思う。そう信じたい。

「う、むっ。こうか？違うな……」

そんな訳で、おそらくどこかに在るであろう始まりの街へと俺は歩きだした。

歩行訓練をかねながら、えっちらおっちらと。

「何処だ、どこに在る街よ……」

のだが。

意気揚々と歩き出して一時間。

早くも迷子全開だった。

「くっ、こういうのは案内板とかあるんじゃないのか」

湖を出て、道らしき開けた大地を慣れない身体をせっせと動かしてきたのだが。

一行に街らしき物の存在が見当たらない。

こう道の片隅とかに標識みたいなのが、

「おっ、？なんだあるじゃないか」

在った。

ぽつねん、と木の立て看板が草むらの脇に立っていた。

「なになに、……始まりの街「ガルガンディア」。この先、30アルト」

ちなみに、1アルトは100メートルである。

「ふむふむ、あと30アルトか」

俺が今居るのは湖から２０アルトくらいだから……。
開始地点から始まりの街まで２時間半くらいか、なかなかに遠いな。
まぁ、いきなりモンスターの巣とかじゃないし。
周りに他のプレイヤーがいない所をみるに、ランダムに配置されるような中ではそこそこなのだろう。
何事も前向きが一番だ。

「さて、あと半分頑張って歩くとしますか」

ちなみに。
標識の矢印が湖の方を示していた事に気付いたのは１０アルト程歩いた時の事。
急いで引き返したのは言うまでもない。

「やっと着いたぜ、ガルガンディア……！」

なんだかんだと、合計３時間程を費やし到着したのは陽も茜色に染まる、夕暮れ時だった。
尤も、よたよた歩きからとてとて歩きにまでランクアップしたのでそう悪いものでもなかったのかもしれない。
華麗なるスタスタ歩きまでの道はもうすぐだと自分を励ましながら街の風景に眼を移す。

「おー、これが始まりの街。なんというか、うん。ファンタジーだな！」

感想にしては些か語彙が足りない発言をしてしまう。

例えるなら中世風といえばいいのか。

中央に一本道が伸び、奥にはやたら大きい城らしきものが見える。

左右には料理店や武器屋、わけの分からない食材らしきものを売っている商店等が軒先で声を張り上げ客引きをしている姿が眼に映る。

通りを歩くＮＰＣも、家族連れや、冒険者なのか軽装の鎧に身を包んだ男女がなにやら店のカウンターで交渉していたり、はたまたこんな時間から酔っぱらいのおっさん連中の笑い会う姿だったりと実に様々であった。

種族こそ人間族、所謂ヒューマンばかりだがこれは仕様なのか、此所が人間族専用の始まりの街なのかは分からない。

が、こういったいかにもな場所は嫌いではない。むしろ好ましい部類に入る。

「いいねいいね！やっぱ、こうでなくっちゃな」

道行く喧噪に、これからの生活の期待が高まる。

逸る気持ちを抑え、先ずはチュートリアルを受ける為に街のどこかに在るであろうギルドを探す事にする。

補足として。

良くある街に入る前のうんぬんかんぬんなイベントはなかった事

を記述しておこう。
てっきり止められたりするのかと思いきや、そんな事はなかった。
門番？寝てたよ。立ったまま。

第１話：ログイン（後書き）

毎日雨ばっかりですね。
深夜投稿が常習犯になってきたＫｅｉです。

はい。
やっと、剛太郎くんもといエディナさんが入っていきました。
早くもうっかりさんなエディナさん。
今後も彼（彼女）は武勇伝を轟かす事でしょう。
次回は街中の施設を巡ります。

ではまた。

第2話：始まりの街ガルガンディア（前書き）

一日遅れの投稿です。
少し内容を濃くしてみました。

第２話：始まりの街ガルガンディア

システム確認……［Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ］
基本ファイルの読み込み……１００％
ユーザーリンクの状態……良好
感覚機能、他全ての人体機能再現率……９８％
誤差の範囲により修正プログラム起動……修正完了
設定されたキャラクター情報データの出力……１００％
時刻設定、パーソナルデータの構成……８９８０２２９
３１９３１０２９３０１２３９１０２１９２３１２３９１２３１９
２０３……
起動プログラムにエラーを検出……
修正不可、アクセス権限が使用出来ません
プログラムに不正なアクセスを確認、排……
……
……
……
……
……

〈第2話：始まりの街ガルガンディア〉

「あの果物みたいなやつ美味そうだな……。そういえば、お金って持ってるのか？」

市場らしき場所に来た。

あちらこちらで生の食材が並んでいる。

果物、魚、肉、香草や調味料もうず高く積み上げられる様には圧倒される。

流石に無一文はいくらなんでもないよな、と身体をまささぐってみる。
表現が妙にいやらし……いやいや。
俺は変態ではない、紳士という名の淑女なのだ！
だめだ、変態っぽい……。

「どこにあるかな、どこにあるかなっと。これかな？」

気を取り直して。
幸運にも文無しスタートではなさそうだった。
それらしき巾着が見つかったので開けてみる、中身はまっくらだ。
不自然な程暗い袋の中。
これはもしやと手を突っ込んでみると案の定だった。
どういった仕組みになっているのか、異次元空間みたいになっていて中にはお金が入っていた。

「……んと、しめて１２４０，０００ガットか。通貨は変わらずと……ぉぉう」

もう何度目かのびっくりだった。
入っているお金の金額が理解出来た事もそうだが。ＶＲ化する前の、このゲームでの持ち金がそっくりそのまま入っていた。
先程の果物が２ガット程だったのを鑑みるに、かなりの資産だという事がわかる。
当分の生活には困らない。
その上、これであれば直ぐにでも店を開く事が出来そうだ。
これは、嬉しい誤算だった。
暫くは冒険者家業で資金集めを覚悟していただけにこの待遇はかなり良いといえるのではないだろうか。

「此所が、ギルドかー」

あちこちから漂う誘惑（食べ物の匂い）に心揺られながら目当ての建物に辿り着く。

他の建物より立派で、それでいて何処か堅牢そうなイメージを与える。

自分の考えが間違っていなければ、ここがゲームの始まり、第一歩となる筈。

実はＶＲ［Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ］

前情報がびっくりする程無いのだ。

幾つかの伏線となる言葉が、意味あり気に書かれているだけで目立った情報は一切なし。

ただここまでの所、大分オーソドックスな展開になっているので大なり小なり、何かしらチュートリアルイベントが起きるであろうと踏んでいる。

高まる期待を胸に、建物に入る。

中は普通に綺麗だった。

匂いも悪臭等一切せず、かなり清潔に保たれている。

吹き抜けの高い天井。

広々としたフロア。
両脇には階段があり二階にいける様になっている。
ぱっと見、テレビ番組に出てくる高級ホテルのロビーみたいな造りだ。
フロアの中央、半分に仕切る様に横に長く伸びたカウンターでは、このギルドの職員らしき人々が冒険者から学者風の老人まで様々な者達の対応に右往左往している。

その溢れる活気に少し気圧されながらも、空いているカウンターに近づく。
受付をしていた女性は俺に気付くと、落ち着いた営業スマイルを浮かべる。

「いらっしゃいませ、なにか御用でしょうか？」

「失礼、チュートリアルってどこで受けられますか？」

「チュートリアル？えーと、新人さんの登録でしょうか？」

「あ、うん。そう、なるのかな？」

「はい、わかりました。では……」

こちらの言葉に一瞬不思議そうな顔をした受付嬢は、納得したようになにやら分厚い冊子を取り出すと机の上にどさりと置く。
我らの生活になじみ深い電話帳よりも分厚くでかい。歴史書ぐらいの大きさだ。
そして、実用本意の飾り化のないインク瓶となんの動物のものか分からない羽根ペンを取り出し、書いてゆく。

「種族は人間族、戦闘技能は主に武具による近接戦、……。
はい、結構です。後は、……」

「あの……」

「はい？」

「冒険者？でなくて、商売を始めようと思っているのですが」

「ああ、そちらでしたか……でも、どちらにせよ登録しておいた方が便利ですよ？」

「そうなんですか？」

「えぇ。恐らくですがこの街は初めてですよね？」

「はい、つい先程来たばかりでして」

「でしたら尚更です。こちらで発行されるギルドカードは冒険者の方に限らず所謂、一種の身分証明になりますから」

「なるほど」

どうやら此所では、ギルドは一つだけらしい。

「続けますね。後は、御名前ですね。こちらはご本人様に書いて頂く必要があります」

「はい」

受付嬢から謎の羽根ペンを受け取り、ちょぼちょぼとインクをつけ名前を書いていく。文字等はネット時代と、どうやら変わっていないらしい。
この［Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ］では使われる言語は主に英語である。
生粋の日本人で学業成績に乏しい俺でも、１０年もプレイしていればそれなりに語学力は着いた。
始めの頃の辞書片手に四苦八苦していた時の事を思い出して、少し吹き出してしまう。
怪訝そうにこちらを見る受付嬢に、なんでもないと手を振り冊子を渡す。

「はい、確認致しました。では、最後ですね。こちらに、手を置いて下さい」

そう言うと、冊子を収納いなにやら板状の物体を出す女性。

「こちらにて、最終登録とギルドカードの発行を行います。手を置いてください」

言われるがままに、正方形の金属板の上に手を乗せる。
ひんやりした感触と共に、置いた手のひらを中心に板に光の筋が走る。
驚く間もなく光りはどんどん溢れ出てくる。
やがて、筋は渦を巻くように太く雲のように煙状に漂う。
徐々に丸く球体の形となった光はふわりと浮き上がり、板を離れ中空に。

キンッ

「これがギルドカードになります」

光の球体が完全に見えなくなるかという所で、小気味のよい金属音と共に光の粒子が飛び、一枚のカードが落ちて来る。

慌てず、慣れたように空中のカードをキャッチした受付の女性は、それをこちらに差し出す。

受け取ると、金属特有の冷たさと不思議なぬくもりがあった。

「おつかれさまでした。これにて、エディナ様のギルド登録を正式に終了致しました事を、ガルガンディア　ギルド本館職員Ｎｏ．４７２６３８１　セリス　ファティマの名において証明いたします」

そして、やおら立ち上がり。

「エディナ様のこれからの日々に、精霊の癒しと加護がもたらされんことをギルド職員一同御祈りしております」

深々とお辞儀をした。

その姿に、言葉にならない感情が胸中を満たす。

ＶＲ　［Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ］　その、おそらくチュートリアルであろうイベントを達成した瞬間であった。

「さてと。では、行きましょうか」

チュートリアルも無事終わり。
これからの事に思案していると、受付の女性がやおらに切り出した。

「は？あの、どこへ？」

「商売を始めるにも、さすがにその格好では怪しまれてしまうだけよ？」

「え、あっ」

いかにも駆け出しです！って感じの布の服に革の軽鎧。
言われてみれば、流石にこの格好のままでは拙いだろう。
初心者新米冒険者ならいいが、この格好で商売はたしかにありえない。

「それに、まだこの街の事ぜんぜん分からないんじゃない？」

それも図星だった。
店を開こうにも、場所も道具もないのだ。
唯一、金銭面での心配があまり無いのが救いだが。
どれもこれも全て手探りなのだ。

「折角の縁だし。この後時間あれば街を案内してあげるけど、どうする？」

正直な所、この話は渡りに船だった。

「あー、うん。よろしくお願いします」

「はい。お願いされました。じゃ、ちょっと入り口の辺りで待ってて ね」

ぱちりとキレイなウインクをして作り物（営業用）でない笑顔を咲かせる受付の女性。

ー仕事（クエスト）ー　等と聞くのは野暮なのだろう。

その姿はとてもＮＰＣには見えない。

そもそも、俺にはＮＰＣとプレイヤーを見分ける方法すら分からないのだから。

ＮＰＣかプレイヤーか区別はつかないけど。

何で初対面の人間に、とか思惑云々は置いておいて。

善意、好意にはきちんと感謝をすべし。

幼い頃に祖父にならった言葉である。

いずれにせよ、ここは純粋に好意に甘えようではないか。

「お待たせしました。それじゃ行きましょうか」

「はいよ、っと」

すっかり日も暮れ、夜の帳が降りてきたが街はまだまだ繁盛中。

むしろここからが柿入れ時な酒場らしき店や、ひとときの華を売る店等。

街が休みを取る事はない。

そんな街中を受付のお姉さん、セリス嬢と一緒に歩を進める。
事前に商売を始める事は言ってあるので、一通りの施設と物の価値やログアウトに必要かもしれない宿の確保等、詳しくはもちろん自分で探すにしても。
簡単にだが一通り案内してくれる彼女には感謝をしてもしきれない。

「さて、先ずはその服からね……」

「お手柔らかに……」

そんな中、先ず入ったのは服飾店。
施設うんぬんの事を聞こうとしたが、巡りながら教えてくれるようだし、こっちは何も知らないのだ。
おとなしく着いていけという事なのだろう。

鼻唄を歌いながら上機嫌に店内を回っていくセリス嬢。
その姿に苦笑しつつ、折角来た事だし自分もどんな服があるのか見て回ることに。

「却下」

「なにゆえ」

が、開始早々。
俺が見ていた服を、隣から覗き込んだセリス嬢から駄目出しを受けた。

「だいたい、なによそれは」
「なにって、服ですが……」
ごくシンプルなワイシャツとスラックスの様な服。
この、多分凛々しい容姿に合わせてみたのだが。
駄目ですか？なんつーかこう男装の麗人！って感じでイイかと思ったのですが。
これだと、着てて個人的にも安心設計だし。
そもそも戦闘しないし、服装はなんでも問題ない筈。
「だめよそんな地味なの！もっと、可愛らしいのを着なきゃ！！」
近い近い。
お顔が近いですよセリス嬢。
鼻息で吹き飛ばされそうです。
というか、キャラ変わってませんか？
気のせいですかそうですか。
「こっちに来なさい！いくつか良いの見繕っておいたから」
「悪い予感しかしないのですが……」
出来るのならば拒否したい。
背筋が寒くなるのを感じたものの。
一応見るだけは。見るだけはと思い、付いていったのだが。
「うわ……」
見せられたのは、凄かった。

こんな薄いので大丈夫なのかってぐらいの、ひらひらしたすかぁと。
もちろん、ふりるは完全そーびで。
上も、やたら凝ったデザインのふわっとした感じのやつ。
いや、服自体はごてごてしたものの割にセンスが良いものだとは分かるんですが。
これ、俺が着るの？場違いじゃね？
というか、着方がわからんのですよ。

「ほら、早く着てみせて」

「いや、こんなの着たことないですよ……」

渡された服をぴらぴら泳がせていると痺れを切らしたのか、セリス嬢は俺を更衣室らしき布で仕切られたスペースに押し込むと自分も入った。

「仕方ないわね、私が着替えさせてあげるから、ほら」

「へっ？あっ、な、なにするだぁ！？」

「ええい、暴れない！大人しく剥かれなさい！あら、やっぱりいいスタイルしてるわね……」

そこからなにがあったのかは、聞かないで頂ければさいわいですました。
一つだけ言うなら、ＶＲまじすげぇ。

その後暫くは着せ替え人形として、店員さんも巻き込んだ動かない石像ｉｎ俺　ｆｅａｔ．じょしのふくにかけるじょーねつ　ｂｙセリス嬢以下女性店員のみなみなさま方。

という図式が成立してしまっていた事を後述しておく。

第2話：始まりの街ガルガンディア（後書き）

蚊取り線香はじめました。
こんばんわＫｅｉです。

セリス嬢は勿論思惑（着せ替え人形になりそう）があってエディナさんに近づきました。
彼女は乙女という名の淑女です（、・ω・，）
今後もエディナさん同様に素晴らしい暴走っぷりを発揮します。

ではまた次回に。

第3話：光明と幻滅（前書き）

ぎりぎりまで、悩んでました。

第3話：光明と幻滅

「巫山戯るな。貴様にくれてやるものはない」

「上等だ、こっちこそ願い下げだ！！」

肩をいからせ立ち去る騎士風の男。

「けっ」

「全く、君たちは折り合いが悪いね」

入れ替わりに。

呆れたような笑みを顔に張り付けながら金髪碧眼の美少年が近づいてくる。

「お前か……、まだ当分必要なかったんじゃないのか？」

「やれやれ、用がなかったら来てはいけないのかい？」

「そんな事はないがよ……」

「別に彼は腕は悪くないよ。むしろ、一級品なのは君も知っているのだろう？」

「……」

「PK（プレイヤーキラー）も一種のプレイスタイルだよ」

「PKには俺は卸すことはしないんだよ」

〈第3話：光明と幻滅〉

意地と根性と気合いと土下座で、なんとか買った物の半分は自分で選んだものをねじ込むことが出来た。
もちろん今現在着ているのはスーツモドキｖｅｒデキル女である。
間違ってもあんなふりふり地獄は相手がＮＰＣだろうと見られるのは御免である。
大量に買った服は、あの謎袋に入れてある。（入るのか心配だったけど入った。出せなくなる事はない、筈）
セリス嬢に聞いてみたところ、この袋は魔導師に頼めば作ってもらえるものらしい。
ただし、どれも容量には限りがあるらしく、ここまで入るのはかなりお高いとか。
といっても超一流の冒険者の中には、容量制限の無いとか反則級の物を持っている事もあるようなので別に珍しいものではなかった。

「さて、此所が中央広場ね。此所から左側に武器防具を扱う店や、魔法の触媒やら、道具とか、主に冒険者達が使うものを扱う店が並んでいるわ。
で、右側も似た様なものだけどあっちはダンジョンがあるから店はまばらね。
したがって、急場で必要そうなものとか回復薬とかが主になるわ。
で、我らがギルド本館がある南側は、主に食料品を扱う店、食事処や宿屋とかが多いわね。
最後に王城もある北側は、城に近いところは貴族達が住んでいるわ。
で、広場に近い方はその貴族達を相手にした商店が軒を連ねている。
とはいっても厳密に区分けされてる訳じゃないから、基本的にはどこにいっても大抵の店はあるし、どこで店を開いても構わないわ」

かなりの面積を誇る中央広場を見渡しながら説明するセリス嬢。
どうやら、此所はこの街の中心地点らしい。
なんでも、大昔に発生した魔物達の長、魔王を大闘士（勇者に非ず）が倒した由緒ある場所なのだとか。

「尤も、北側に店を持つ場合はそれなりの手順を踏む必要があるのよね」

「金、か」

「ざっくり言ってしまえばそうなるわ」

つまり、北側で店を開けるには貴族連中に気に入られなければいけないらしい。
勿論、面倒事は嫌いなほうなので北側は候補から外す。

「それと、北側を除けば店は空いているところを使って大丈夫よ。勿論色々内装を変えたり、設備を整えるにはお金がかかるけどね」

それはありがたい。
シャバ代（土地代）が掛からないのはかなり予算が浮く。

話を纏めると。
中央広場を境に北側（こっちに王城もある）に富裕層、東西に冒険用の店、南側に一般、食料店系。
後は回りを囲うようにこの街の住民たちの家等が在る、と。
そして空き屋を改装すれば店は開く事が出来る。
大体の構造は把握出来た。

「こんなところかしら。何か気になる所はある？」

「いや、大丈夫。後は詳しく必要な物が必要になったら店の場所を教えてもらうよ」

先程の出来事もあり、セリス嬢の方から砕けた口調になったのでこちらも敬語は使わず話す事になった。

まさか、セリス嬢がこんなにアグレッシブな性格をしているとは思わなかった。

さようなら清楚な美しい数時間前。こんにちは残酷な現実（いま）。

聞いた所彼女と年齢は同じようだったというのも理由に入る。

「分かったわ。じゃ、そろそろご飯を食べに行きましょうか」

すっかり忘れていたが、ゲーム内でも腹は減る。

全く、よく作ったものだと関心させられる。

ほんとにどんな仕組みになっているのやら。

「うわぁ……！」

それは喜びだった

神が人間に与えた原初の理

それすなわち、「食」

なぜ、食すのか？

人類の歴史

それは食事の歴史

太古の時代より続く

果ての無いエピローグ
栄光の境地
数多犠牲の代償
そして知る
人々は武器をすて
ナイフとフォークを握る

「お前ら全部丸ごと食い尽くす……！」

信ずる道
そこに答えがある
その名はそう、ステーキという
いざゆかん、桃源郷へ

「いただきます」

その前に挨拶挨拶。
作ってくれた方へ感謝を忘れてはいけません。
キチンとお祈りをした後、眼前の香ばしい匂いを立たせる物体を口へと運ぶ。

「うまうま！」

溢れるジューシーな肉汁。
たまらない食感。
濃厚なソースもこれまたくどくなく味を更に引き立てる。
口の中で繰り広げられるハーモニー。
これは旨い、旨すぎる！

「あらあら」

なんせ性格はあれですが美女との食事ですよ。
しかも、見た事無い料理ですよ。
さらにさらに、旨いときたら文句なしでしょう！
あまりの美味しさにフォークがとどまることを知らない。
嗚呼、こんな幸せあっていいのか……。

「もくきゅもきゅ。うまうま。ぱくぱく……おかわり」

「はいはい、わかったから焦らないの」

セリス嬢のこちらを見る眼が暖かいとかそんなのは気にしない。
オール、ハイル、ミート！である。

「うーまーいぞー！」

その後、食後のデザートまで美味しく頂いて、今日はお別れとなった。
職員はギルド会館に個別の部屋があるんだとかで、会館に入って行った。

それにしても、セリス嬢万々歳である。
あの中央広場に銅像を建ててもいいぐらいだった。
腹も満たされたし、もう少し街を見て回るかな。

そんな良い夢旅気分で街を再び歩いていたのが裏目にでたのか、人とぶつかってしまった。

「とと、失礼」

「こちらこそ、怪我はない、……か」

「お前は……」

「……久し振りだな」

何故か憮然となる騎士風の男。

ＶＲ初の見知った顔との出会いは唐突で、かなり微妙なものだった。

「へー、殺戮騎士と呼ばれたお前が正式な騎士様とはねー」

セリス嬢に最後に教えてもらったおすすめの宿屋。

良心的な値段ながら中々のところだ。

決して高級ではないが、掃除の行き届いた屋内は店主の人柄の良さがにじみ出ているようである。

その一階、酒場兼食事をする為のテーブル席の一つに俺達は居た。

こいつの名前は、カーグ。

昔っから折り合いの着かない、犬猿の仲といったやつである。

お連れの、部下らしい（カーグのくせに生意気な）方々は入り口の方で待機しているらしい。

別に部下が居るからって凄いとか思ったりは全然まったくこれっ

ぽっちもしない。
くっ、こいついつの間にリア充になりやがった。爆散しろ。
どうやら、最後の最後にして天は俺を見放したらしい。
「黙れ、これでも苦労したんだ」
「ふーん。それは良かった」
「お前な……」
「冗談だ。そんなに怒るな、ここは俺が奢ってやるから」
「水しか飲んでいないのに恩を着せようとするな！」
後に、二人が気軽に話し合う姿を遠くから見た兵達によりお固い隊長に女が出来た。と噂されることになる。
そして、数日後のとある隊の訓練量が3倍になったらしいと門兵は背筋を寒くした。

「さて、一旦戻るか。お前もまだ此所にいるのか？」
流石に今日はここまでにしておこう。

明日もバイトがあるし。
ＶＲ中に向こうの自分が体力回復しているのかもわからないし。
取りあえず、初日にしては上々だろう。

「戻る、ね……。あぁ、そうか……少し待て」

「なんだよ？っｔてめぇ！」

席を立った俺の腕をいきなり腕を掴んでくる。
思ったより強い力に抗えず、そのまま席へと座らされる。

「……いいか、よく聞いておけ。そして今直ぐ覚悟を決めろ」

「は？一体何を……」

「お前はさっきログインしたばかりだな？」

「あ、ああ。そうだ」

いきなりの事に苛立つもそれ以上に困惑した。
眼前のやけに真剣な表情に戸惑いながらも頷く。

「単刀直入に聞く、お前はこの世界をどう思っている？」

「どうって、すげぇよな。此所まで再現するなんて、流石だよな」

「やはりか……」

「なんだよ、言いたい事が有るならハッキリ言えよ」

やけにもったいぶるというか、焦らしてくる？
何か言いにくい事でもあるのだろうか。
「わかった」
「なにが」
「真面目に聞け。これは嘘でもなんでもないからな」
「だから、なんだってんだよ！」
「……じゃない」
「……？」
「此所、この世界はゲームじゃないと言ったんだ」
沈黙。
なにを言っているのか理解できなかった。
眼前の男が口走った言葉があまりにも、あんまりな内容だった。
次に、ジョークにしてはやけに寒いなと認識するとこみ上げる笑いが零れた。
「ぷっははは。いきなりなにを言い出すのかと思ったら！」
「……」
「おいおい、お前もログインしたならわかってるだろ？いくらＶＲだからって」

「……」

「……」

「……」

「なに、黙ってんだよ。そんな冗談……」

「事実だ」

変わらない、嘘にしては真面目すぎる表情に、俺の頭は一瞬の内に冷却される。

「おかしいとは思わなかったのか？やたら秘匿された情報、いきなり放り出される始まり方、コマンドウィンドウ等のゲームらしいシステムの無さ。味まで分かる完璧すぎる再現性」

「たしかに、……って、まさか……！！」

まて、そうなると。

否、否、否、否、否、否、否、否、否、否、否、否、否、否。理解不能。

もしそのことばがほんとうだったら。

このセカイはイッタイナンダ？

「……そのまさか、だ」

まさか、そんな……。

「嘘だろ、それじゃ、俺は」

「帰れない。今まで此所にきた連中と同じく、な」

やや、遠慮がちに。しかし、はっきりと言い切るカーグ。

その言葉に俺は、地面が崩れ落ちる感覚を味わった。

ＶＲ［Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ］

世界で最高の技術を使い開発されたゲーム。

だが、この舞台にはとんでもない魔物が棲んでいた。

そう、入り込んだ者を決して逃がす事のない牢獄という。

第3話：光明と幻滅（後書き）

ふと、アイスキャンデーを自作しようと思いました。
こんばんわ、Ｋｅｉです。さて、ジュースを買いにいこう。

ついに、念願のメインヒロイン登場です！やったね！
モブ臭ただようカーグ君ですが、彼はきっと大丈夫。
だって、メインヒロインだもの。

冗談はこのへんで。
真面目な話、この展開でいいのか迷ってました。
ですが物語を進めて行く上で、異世界の日常風景が主になるので、
批判の声も多く上がるであろう中、トリップという形にしました。
これからも。
おいでませ、ねとげの世界へ。を暖かく見守って頂ければ幸いです。

ではまた。

第４話：そして物語は始まりの鐘を鳴らす

〈第４話：そして物語は始まりの鐘を鳴らす〉

「嘘だろ、なぁ、おぃ……？」

へたり込んだまま、縋るように問いかける。
何も言わない。
代わりに小さく首を横に振る。
僅かなりの希望は、断たれた。

「そ、んな……」

多分、気付いてはいた。
街行く人々、完璧に再現された五感。
システム説明、ゲーム案内の皆無。
心の何処かでおかしいと分かってはいたんだ。
ただ、それは。それを認めてしまっては。

「それで、どうするんだ」

「どうって……？」

「これからだ。それでも手がかりを探すのか、この世界で生きるのか」

「そんなこと言われても、わかんねぇよ……」

「どちらにしろ、だ。当分はここに居なくてはならないんだ。アテは有るのか？」

「……金は、ある。だから、暫くはどうにか

出来る、と思う」

「そうか。当座はそれでいいが、冒険者でもやるのか？」

「いや、多分。商売することになる、と思う」

「思うって、お前な……」

仕方ないだろう！

いきなり、ゲームの世界に閉じ込められました。

はい、あなたはどうしますかなんて決められねぇよ。

その後も向こうからの問いかけにぽつりぽつりと答えていった。

「少しはまとまったか？」

いきなりの事にショックを受けていた俺だったが。

暫く話していく内に、心境に変化が出てきた。

同時に、もともと俺はそんなに元の世界に未練はなかったのだと気付く。

ただ、突然の自体に戸惑っていたのが大きかったのだ。

残してきた恋人もいないし、あいつも同時期にログインしたからこっちに居るだろう。

それに、知り合いなんてこのゲームで会った連中ばかりだ。

お金も有る、セリア嬢というこの世界の住人とも出会えた、ここがあのゲームと変わらない世界なら稼ぐ手段もある。

そこまで、悲観しなくてもいいのではないだろうか。

「うん、そうだな。いつまでも悩んでてもしょうがない。人生前向きにだ！」

「そういう所は相変わらずだな」

呆れながらもどことなく安堵したような表情を浮かべるカーグ。

「それに、折角のファンタジーだ。うじうじしてたら勿体ないしな」

まだ、気持ちは揺らいでいるけど。
それで、どうこうなるわけじゃない。
大きく一息をつく。
いいじゃないか、こんな経験普通だったら出来ないのだ。

「！？」

そう安心したのも束の間、突然身体が震えた。
下腹部に軽い疼き。
これは。

「どうした？」

「や、やばい。しし小便、でそう」

「な！？ちょっと待て、納屋まで我慢しろ！」

いつだったか、聞いた事があった。
女性のそれは、男性よりも我慢のきかないものであると。
ずっと、気を張りつめていたせいか、一度緩めてしまった身体に力が入らない。

「あ、も、……だめ……げんかぃ」

すー、と僅かな解放感と共に。
履いていたズボンの色が濃くなっていった。

「……ごめん」

気合い入れ直した矢先にこれだよ！？
うぅ、死にたい……。

気まずくて顔が上げられない。
呆れてるだろうなぁ。

「まぁ、仕方ないだろ。いきなり性別が変わってしまったんだ。誰だって戸惑う」

優しさが、いたい。
心にヒビがハイリマスです。
そして、ますます顔がアガリマセン。

俺がイタシテしまった後、素早く俺に着ていたマントを羽織らせ、抱き上げ宿屋の部屋まで連れて行き、部下であろう女性の人を呼んで代わりの着替えを用意してもらい、子供よろしく女性のお手を煩

わせ、一段落着いた後再び向かい合っているのが現在の状況である。

ベットにぺたりと座り込んだまま俯く俺。

どうしてこうなったと言いたい。

ちらりと、恐る恐るやつ、の方を見る。

「なんというか、あれだ。初めから完璧なやつはいない。少しずつ慣れていけばいいさ」

「慣れてどうしろと……」

誰得ですか。俺損ですよ。そんなの勘弁ですだよ。

「そこまで言えれば、心配はないな」

はくじょーものー。

俺に味方はいないのか。

「いや、女扱いしろというのなら、それでもいいが……」

「気持ち悪いことというな！！」

「……俺にどうしろと」

大仰に溜め息をはくカーグ。

そんな仕草まで様になっているのは、かなりむかつく。

「……」

と、いうかだ。冷静になってよくよく考えると。

こいつ、そんな悪いやつじゃないのではないか？
いや、確かに仲は悪かった。最悪だったと言ってもいい。
でも、此所に来てからこいつは何もしてない。
むしろ、俺に気をつかったり、下の、ごほごほん。まぁ、色々心配してくれてたりしていた。
それに対して俺はなにをした？

「うっ……」

やばい。これ俺厭な奴だろ。
もう顔が地面に釘付けですよ。
今直ぐ地面に犬神家ですよ。

「いたっ！？なにをするだ！？」

「どうせ、俺はなんて嫌みな事をーとか思っていたのだろう」

「な、なぜ分かったエスパー！？」

「わからいでか。取りあえず、お前の嫌みなんぞ聞き飽きている。今更感情など1欠片も動かん」

「それはそれで、人として終わってるような……」

「人の話しをきちんと聞こうか」

「はい、すみません。チョーシ乗りました、ごめんなさい！」

優しくこめかみにそえられる二本の指。
たまらないプレッシャーに速攻白旗です。

「……で、話は戻るが。これからどうするんだ？」
「取りあえず、今日は此所に泊まる。元々明日はセリス嬢に空き家の有りそうな所を教えてもらうつもりだったし」
「セリス嬢？ギルド本館の受付のセリス　ファティマか？」
「知ってるのか、って当たり前か」
そういえばこいつは騎士様なのだ。
城勤めで、それなりにえらいみたいだし街の若い奥様や少女にきゃーきゃー言われて、前言撤回。やっぱむかつく。
「なにか考えたか？」
ギャー、エスパーコワイヨー！
「なんでもないぞえ？主の勘違いじゃろう」
「口調が変わっている、ドボンだ」
「みぎゃーす！？」
今度は容赦のないアイアンクローが降ってきた。
あまりの痛みに叫び声を上げながら気絶する。
それが、異世界初日最後の光景だった。

「うん、……くるんじゃねー、……俺は黒いタイツなんぞきないんだー……ん、あ？」

見慣れない天井。
僅かにきしみを上げる木造のベット。
そこは住み慣れた我が家、なわけがなく。
昨日とっていた宿屋の一室だった。
窓から差し込む光からするに朝方のようだ。

「嗚呼、そうか俺異世界に来たんだったな……」

正確にはゲームの世界、ではあるがどの道始まってすぐこうなったのだから似たようなものだろう。
目蓋をしょぼつかせながら立ち上がると大きく伸びをする。
割と気持ちに余裕があるのは、余り悲観的にならないようにしているからだ。
沈んでいても何も状況は変わらない。
それに、一人暮らしは元々長かった。
少し遠い引っ越しをした。
そんな風に思えば少しは気分もマシになる。

「くっ、……ふぁ。さて、どうするか」

あくびをかみ殺して、軽く眼を擦ると備え付けのテーブルになにやら紙が置いてあった。
どうやらカーグのやつが書いていったらしい。

「なになに、「なにか有れば、俺の所へ来い。城の兵には話しを通しておく。
それと、あまりうろちょろして妹に迷惑をかけるなよ。」か。やたら達筆だな……」

さらりと出てきたお城勤めを表す文章。
ほんとに騎士やってんだなぁと改めて思い知った。
ところで、妹って誰さね。兄妹いたのか。

とと、いつまでもぼんやりとはしていられない。今日は、セリス嬢と物件探しなのだ。
部屋の隅にある洗面台らしきもので顔をばしゃばしゃと。
うん、すっきり。
ついでに、髪をちょいちょいと。
長いわりに良くまとまるなぁ。
そしてベットに戻り着替え。

「うわぁ、やっぱ全部なってるんだな」

一度、確認の為に裸族と化してみたのだが。どこからどうみても女性です、ほんとうにありがとうございました。
おお、マイサンよ。いなくなってしまうとは情けない。
阿呆らし。早く着替えよう。
手早く、替えのスーツモドキに着替える。これが俺のジャスティス。

因みにやっぱり興奮とかはしなかった。
変わりになんというかお顔が真っ赤っかになりましたが。
ええぇ、はずかしいに決まっているじゃないか！

下着は一度付けずに着たら痛くてしょうがなかったのでしぶしぶ付けた。
ランニングシャツみたいなやつだったのが救いだ。
ふよんふよん動く固まりを睨みつけ、自分の行動に落ち込む。
なにやってんだ俺……。

ローテンションのまま、未だ慣れない身体を動かし朝の栄養補給の為一階へと降りて行く。
異世界生活二日目。
今日は良い事がありますように。

第４話：そして物語は始まりの鐘を鳴らす（後書き）

デイリーランキング入りありがとうございます！！
あまりの嬉しさに雨に打たれながら、街をさまよい走りました。
こんばんは、Ｋｅｉです。

やらかしました。
エディナさん、最大のうっかり発動です。
そして数少ないであろう、このお話を見て下さっている女性読者さま、
すみませんごめんなさいこんな作者で今直ぐ犬神家してきます土へと還ります。

こほんっ。
それはそれとして。
ついに物語が本格的に始まります。
ここまでが、いわゆるプロローグになるかと。
そして、次回からはエディナさんのお仕事編がスタート。

ではまた。

第５話：エディナさんのお仕事１（前書き）

目標だった、一日　１００００ＰＶ　１０００ユニークを大幅突破！
これもみなさまのお蔭です。
ありがとうございます！

第5話：エディナさんのお仕事1

「ぉおー、なんだこれ、めちゃくちゃ本格的！なになに炉の温度は放っておくと下がります、適度にクリックして空気を送り込みましょう？そんなとこまで作ってんの？！」

カチカチっ
　　カンッカン
カチカチカチ
　　カンッカンッカコン

「むっ、う、こんなテンポでいいのか？あー、また駄目になった！」

「よし、ここで。よし、形が出来てきた……。あとは……」

「で、出来たっ。完成したぞー！！」

「なあなあなあ、今日も討伐いくんだろう？こ、これ持っていってくれないか？」

「これは、出来たのかい？」

「ああ！俺の記念すべき一本目だ！」

「エディナさーん！またあの人来てますよー」

「……居ないと言ってくれ」

「ログイン情報見てるんだから無理ですよぅー。こっちも仕事にならないんです、どうにかして下さい」

「だが、断る」

「しかしエディナはまわりこまれてしまった」

「……」

「……」

「や、やぁ久しぶりだねエディナちゃん」

「マエストロ。また断ったんですか？」

「いや、無理だろ。あんな本数卸せねえよ。ひとりでやってんだし」

「だって、「金色の傭兵団」って言ったら、日本サーバー最大手のギルドでしょ。もったいない。弟子でも取ればいいのに」

「俺は誰かに教えるのはさっぱりなんだ。それに剣を渡す相手の顔ぐらいきちんと見たいんだ」

「そんな事だから、孤高の姫親方なんて呼ばれるんですよ？」

「女キャラだからその渾名はしょうがないんだが、中身男だぞ。別に性別隠してないのに、何故だ」

「皆知ってますよ？でも、だからこそ逆に俺っ娘イイ！だそうです」

「はぁ、もう好きにしてくれ……」

〈第５話：エディナさんのお仕事１〉

仕事場兼おうちを探そう。

「なるほど、鍛冶ね」

そんなこんなで、朝ごはんをしっかりと頂いた後、本日非番らしいセリス嬢とギルドにて再会を果たした。
ちなみに、朝のメニューはパンに野菜と果物をはさんだ物とコンソメ風のスープ。
シャキシャキの野菜と果物の酸味がマッチしていてとても美味しかった。

会った当初、少しだけ気まずかったが、話していく内にふっきれた。
必要なのはこれから俺が、どうこの世界の人達と向き合うかだ。
折り合いは自分の中で付けなければいけない。
なんて肩肘を張るのもそこそこに、早速本題について尋ねる。

「そう、武器専門でいこうと思ってる。だから、炉があるところが出来ればいいんだけど……」

そう、俺が「Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ」で培ってきた技能、鍛冶である。
長い間やってきたのだ、たとえそれがゲームだからといって馬鹿にできない。
それこそ、画面越しではあったが金槌の種類から大きさ、振る強さから、叩く方向まで。

あげくの果てには金属の融解状況まで再現されていたのだから半端じゃない。
ある意味、疑似シュミレーターである。
そんな中でそこそこ造れていたのだ。
他に、出来そうな事などない俺にはこれが一番だろう。

「でも、資金は有るみたいだし新しく入れても良いんじゃない？魔力炉とか色々あるみたいだし。どの道、炉心の精霊石は自前だし」

「そんなものまであるのか？！」

と、ここでまたもや聞き覚えのない単語が飛び出した。
どうやら魔力を元にした炉があるらしい。
なにそれ、かっこいい。

驚く俺に怪訝そうな眼差しでこちらを見るセリス嬢。
えーとこれは、拙いか？

「そんなって、昔ならいざ知らず。今は何処も魔力炉でやるのが普通よ？」

「いや、今まで普通の釜戸でやってたから……」

案の定だった。
ここではポピュラーなものだったらしい。
内心慌ててつつも、適当に言い訳をする。
まぁ、普通の炉を使う所もあってもおかしくはないだろうと。
古い人間なんですよー、とアピールする。

「あら、そうだったの。って魔力炉も使わないなんてどんな田舎からきたのよ」

「あはは、まぁね……」

「……まぁ、いいわ。じゃあ炉も含めて探してみましょうか」

暫くこちらを見ていたセリス嬢だったが、溜め息を一つ。
苦笑いを浮かべ流してくれた。

「お願いします、セリス先生」

それに、少しの罪悪感を感じながらも茶化すようにおどけて言う。
一瞬眼を見開いた彼女だったが、互いに顔を見合わせ、どちらからともなく吹き出して笑う。
いつか、彼女には正直に話さないとなぁ、と思いながら共に街を歩く。

「此所はどうかしら？」

「んー、ちょっと広さが足りないかな」

「そう、次ね」

「此所はどうかしら？」

「ここはパス。空気の流れが悪い」

「此所は？」

「んー、もう少し良い所ない？」

「此所もだめ？わりと今までのなかでは良いと思うのだけど」

「そうなんだけどね……」

朝方から始まった物件探しは、割と難航していた。
わざわざ案内してくれているセリス嬢には大変申し訳ないのだが。
これぱっかりは譲れないものがある。
正直な話、居住スペースは作業場と一緒で構わない。
最悪隅っこに布団を敷ければそれでいい。
ただし店のスペース、作業空間にはあんまり妥協はしたくないのだ。

そんな訳で、あーでもないこーでもないと街を右往左往している内にすっかり昼を過ぎてしまった。
ご飯もまだだったし、ひと休憩という事で少し遅めの昼食をとる

ことに。

時間の概念だが、ここでも一日二十四時間のようだ。
ただし一年は四百日と少々長め。
この街では時間は楼塔と呼ばれる鐘をならす塔があり、そこで3時間に一回鐘がなる事で判断する事ができる。
時計もあるらしいのだが、とんでもない高級品でめったにお目にかかれないものらしい。

「さて、あそこで駄目となると……」

昨晩も来たセリス嬢おすすめの料理屋。
値段も安く、味も良い、店の雰囲気も清楚という良いとこ取りの名店である。
少し遅いのでランチメニューみたいなのはなかったが、普通にこの料理は旨い。
シチューとパン、それにサイドメニューで唐揚げみたいなやつも一皿。
もくもく、こくこくと頂きました。こちそうさまです。

腹も膨れ、休憩を終えたので再びお家探しへ。
中央広場を通り、東地区へと入っていく。
次が、どうやらおすすめの最後になるらしい。

「此所ね」

最後の場所は東地区入って少ししたところを右に曲がった所にあった。

眼に飛び込んできたのは中々に大きい建物だった。

外見はぼろいが中に入ってみれば造りがしっかりしているのか、見た目の割に倒壊している所が見られない。

広さも十分どころか二階まで有る、風通しも良さそう、作業場も文句なし。

気になるのは、なんでこんないいとこにだれも手をつけてないのか？

大通りにある訳じゃないにしても一本角を曲がって直ぐなのだ。

こんな良い場所を残しておく筈が。

「普通ならこんな広さの所、すぐに店が入るのだけどね」

疑問が顔に出ていたのかセリス嬢が説明してくれる。

なにやらここはワケアリな所らしい。

「立地条件はかなり良いからね。何人もの商売人がここに店を構えたわ。ただね、此所っていわくつきの場所でね。出るらしいのよ」

セリス嬢いわく。

此所には、昔人間に非道な扱いを受け亡くなったものの幽霊が出るらしい。

人によって、髪の長い女であったり、ちいさな男の子であったりと様々らしいのだが。

そんな訳で、どの店主も商売などする暇もなく店を閉めたのだとか。

それ以来、此所はナニカが出るとして誰にも使われることがなかった。

「出る、ねぇ……」

所謂、俺は無霊能力者で。
幽霊とかの現象には立ち会った事がまったくない。
よく知り合いと心霊スポットに行ったみたのに、結局自分だけなにも見えない起こらないとかそんな感じである。
というか、ここの人達は魔法（正確には魔導）だのがあるのに幽霊は駄目らしい。
モンスターだと平気らしいのだが、違いが俺にはさっぱりわからん。

第一そんなの、本当に居るわけが……りぃん……んあ？
少し待とうじゃないか。
そんな、幽霊なんて居る訳が……りぃん……、……。

「なん、だと……？」

……りぃん……？

いたよ、出たよ。出現しましたよ。
こう、煙りがちっちゃい人みたいな形をとったのが、セリス嬢の後ろに浮かんでおりますよ。

……りぃん……

やばいぞ。
なんかやたらきゃわいいのが首をかしげてらっしゃいます。
セリス嬢ではないが、これは可愛い。
眼とか口とかが無いし人型もどきな感じではあるが、ちっこくてふわふわ浮いてるのが愛嬌があっていい。
じっとみつめると、困ったようにチカチカ光るのがかわいさを倍プッシュだ。

え、ていうか出るってこれのこと？
怖いどころか、お持ち帰りしたいぐらいですよ？
むしろ、こんな可愛い生物？と一緒ならばっちこいですよ。
あ、残念。どっか飛んでいった。
やっぱり、ガン視しすぎたか？

「セリス嬢」

「なに、やっぱり嫌？」

「ここにする」

「そうよね、それじゃあやっぱりさっきのところ、……えぇ！！？」

「むしろ、ここ以外あり得ない」

驚くセリス嬢だが俺の心は既にあのきゃわいこちゃん基、この場所以外を選択する事はありえない。

それぐらい此所は良い場所だった。
真面目な話、自分の思い描いていた大きさぴったりだったのだ。
そんな場所をみすみす逃す手はない。

「は、ほんとに良いの？もうちょっとゆっくり考えてからでも」
表に出てからもしつこく考え直せと言ってくるセリス嬢。
何が不満なのだろうか。
やっぱり、幽霊が出る場所というのが駄目なのか。

「というか、幽霊とか出てきてないよ。今のところ」
実際には出てきたのだが、きゃわいいのが。
ただ、こうでも言わないと納得してくれそうになかったので。

「たしかに、……そうね。そうよね、迷信よね」
説得が効いたのか、やけに何度も頷くセリス嬢。なにか自分に言い聞かせるような……嗚呼。

「成る程、苦手なのか」

「だ誰が苦手なものですかわたしはそんな幽霊なんて非学的なもの

なんて全然これっぽっちもええそうよほんとに怖いなんて感情がうかぶわけがないのよそうに決まっているわあたりまえじゃないそんなのがだいたい……」

「ちょっ、どうしたのセリス嬢！？わかった、分かったから！俺が悪かったから落ちついてセリス嬢。周りの人の眼がイタイから、いたたまれないから！」

見回してみると、まわりの人達がドン引きだった。

そんな空気に俺が耐えられる筈もなく。

能面な無表情でぶつぶつと呟きつつけるセリス嬢をなんとか、引きずりながらその場を後にした俺だった。

というかだ。

こっちの方が絶対ホラーだろ……。

第5話：エディナさんのお仕事1（後書き）

セリス嬢無双
朝ぼらけな時間にグットモーニング、Ｋｅｉです。

ちなみに気付いた方も多いかと思いますがカーグ君はセリス嬢の兄妹です。
さすがリア充。破裂しろ。

お店の場所が決定しました。
ついでに、可愛いらしい同居霊まで着いてきます。
この同居霊ちゃん、名前は今のところ決まってません。
が女の子です。……幽霊萌え？
だめだ、頭が沸いてきてますね。
そろそろ寝なきゃ。

ではまた次回で。

第6話：エディナさんのお仕事2（前書き）

うぬぬ、筆が停滞気味になってますね。
気合い入れねば。

第6話：エディナさんのお仕事2

一般的に、この世界には精霊石という物が存在する。
生霊である精霊達の寿命が尽きる時、その姿はそれぞれの属性を持った魔力の源となりこの世界に大気と共に留まる。
そんな中、稀に結晶化する事があるらしい。
その結晶化したものがやがて集まり、精霊石と呼ばれるものとなる。
精霊石は一定の魔力を保持するだけでなく、時間を置く事によって大気から魔力を取り込み繰り返し使用する事が可能になっている。
今日では研究が進み精霊石を利用した魔力エネルギー充填器として魔導士達のみならず、魔導の使えない人々でも使用出来る火種や水源として日常的な生活にも大きく関わるようになった。

〈第６話：エディナさんのお仕事２〉
お店をつくろう

店の場所兼住処が決まったので、早速店作りに入る。
道具から、魔力炉、作製したものを並べるショーウィンドウ、そして家具一式など山のような物が待っているのだ。
お金足りるのか……足りるよね。

「さて、先ずは店の改装からか」

それよりも先に。
何か物を置くにしても店の体裁が整っていなければ意味がない。
なので、始めは建物の直しからだ。

「そうね、ここからは私よりも商会の人達に頼んだ方が良いわね」

「成る程」

移動しながら商会について聞く。
商会は良く聞く、想像通りの商会と同じらしい。
商店の規模が大きくなったもの、日本での会社企業といった所だ。
この街は商業ギルドは無いが組合いみたいなのはあるらしい。
それも、集まり過ぎてあまり大商店に権威を持たせないように精々商店街の寄り合い程度が許可されているだけという事。
これから行く、バーンスタイン商会も数ある組合いの中の一つ。
改装、建築を主に得意とする所で、この辺りでも一番の仕事をするのだとか。

やってきましたバーンスタイン商会。
でかいにはでかいが非常にシンプルというか装飾のない所が、逆に職人っぽくていい。
商会の仕事振りを表すかのような、しっかりとした造りの扉を開けて中に入る。

「すみませーん！」

「はいはーい、ちょっと待って下さいねー！」

館中では絶え間なく人々が動いていた。ギルドもそうだったが、ここはそれを遥かに超える喧しさだ。
怒号や罵声が遠慮のかけらもなく飛び交う。
その声に負けないようにこちらも叫ぶ様に声を出す。
すると騒がしい中でも一際、やたらと元気の良い声が響く。

ばたばたと走ってくる女性、少女といった方が正しいのだろう。
「おまたせしましたー！本日は当商会になにか御用でしょうか！あれ、ギルド受付の？ありゃ、あたし等なにかしちゃいましたか？！」
頭のてっぺんで髪を二つに結い分けた少女はこちらに駆け寄るなり、笑顔になり、セリス嬢を見て心配そうな顔になったりと百面相をする。
ころころ変わる感情表現豊かな少女。
実に元気のよい娘さんである。
「いえ、違いますわ。今日は、こちらのエディナさんが新しく店を構えるので改装をお願いしたいと伺ったのですけれども」
「あ、なるほど。はい！新規のお客さんですねー。えーと、改装ですか。具体的にはどのくらいの大きさのを使うご予定で？あ、こちらにどうぞ」
そんな中、セリス嬢は顔色一つ変えず本来の用件を伝える。
荒くれ共をいつも捌いているのだ。
この程度は大したことはないのだろう。
「あぁ、ありがとう。だいたい……で、……」
「はいはい、二階建てで基本骨子はそのままにして壁の塗り直しとこまかい修復、床板の張り替え、割れたガラス窓の交換、扉の追加、工房の新規設置。おー、これはー仕事ですねー。腕が鳴っちゃいますよ！後は内装はと、ふむふむ」
少女の快活さに少し気圧されながらも、案内されたテーブルに座

り思い描いていた設計プランを話していく。
こちらの拙い身振り手振りにも理解を示してくれている所を見るに、若いが仕事暦は長いようで実に頼もしい。
あーだこーだと、時折専門家からのアドバイスも交えつつ、たまにセリス嬢のもっと可愛く花柄とかーという台詞を聞き流しながら話しは進んでゆく。
セリス嬢、鍛冶場に花柄はちょっと……。

「わっかりましたー！では、二日後にまた来て下さい。予算は、このくらいでどうでしょー？」

一時間程話し、建築上の問題等もふまえた上で店の改装計画の目処は立った。
そして、差し出された紙（色の白い羊皮紙風）に記された金額に驚嘆した。
もちろん良い意味で。
思わず三回くらい聞いてしまった。
日本の、自分が住んでいた地域での相場しか分からないが、そのうろ覚えの物価を鑑みても安かった。

折角なのでと、商品を飾る棚や家具も造れるのかと聞いてみたがやはり畑違いらしい。
ただ、付き合いのある所で良いのならと、家具やら店の内装用の物を代わりに頼んでもらった。もちろん紹介料を払う約束でと。

ぶんぶかと手を振り、最後まで元気のよさを見せてくれる看板娘の見送りを受けて次の店へと向かう。

「さて、次は精霊石ね」

きた。

精霊石自体は見た事がある。

夜、陽が沈んだ後の街を明るく灯すランプに入ったものがそれだ。

海中での堆積物や山の中で層になって混じり合い出来る固まり、宝石。

それの原石(ルース)が一番形が近い。

見てくれは不思議な光る粒が着いてたり、中に透けて見える岩石、と言えば分かり易いだろうか。

それを削り、形を整え綺麗なキラキラ光る宝石をつくり出すのと同じく、魔力の通りや使い方等様々な事柄に適したように、また石に秘められた力を引き出すように加工するのが精霊士と呼ばれる者達だ。

この精霊士。

これだけは普通の職業と少し異なり、店を開くにはその国の王に許可を取らなければならない。

所謂、国家認定制度の職業で、とてつもなく厳しい試験を通過しなければならないらしく、精霊士は地位でいうならば貴族以上、その国の王とて命令権を持つ事が出来ないんだとか。

また、様々な事で優遇されるらしい。
難関どころではない道の狭さだが、その名誉を目指さんと若い者達は精霊士になるべく日夜あくせくしているとか。
そんな凄い職業、この街の精霊士が営む店はどのようなものなのか。
妄想膨らむ中辿り着いた所はベクトルを変えて予想を裏切らないものだった。

精霊石加工、精製屋　［アイクリルコラード］

中央広場から西へ少しいった所にその店は在った。
個人営業の店舗なのか大きさはこの辺りの店とほぼ同じ。
花の装飾がなされたお洒落な表札にほんわかしながら早速店の中へ。
店内は狭く、人が二人も通れるかと行ったぐらいのスペースしか空いていない。
かといって掃除がされていない訳ではないようで、単に物が許容スペースを超えてしまっているだけのようだ。
見た感じ、ごっちゃごっちゃした感じの雑然とした店だった。

しかし、至る所に精霊石のサンプルだろうか？が置いてあり、店内は明かりもないのに前が見えなくなる事もなく、多種多様な煌めきが幻想的な雰囲気を出していた。
時折、光の粒子が弾けているのは魔力なのか。
ぼうっと佇んでいると奥の方からしわがれた声が掛かる。
「おやおや、見ない貌が居るね」

年をかなり召してはいるが腰も曲がらず、しっかりとこちらに歩んでくる老女。
ダークトーンのローブを羽織っている姿は魔女そのものである。
その姿を見たセリス嬢は足早に老女の方へと歩く。
遅れて俺もいそいそと着いて行く。

「こんにちは」

「おうおう、ギルドの嬢ちゃんかい。老害爺は元気かい？」

「ご健在ですよ。未だに現場に出ようとしてるぐらいです。今日は彼女に精霊石をいくつかお願いしたく参りましたアイラ様」

親しげに話すセリス嬢とアイラと呼ばれた老女。
こちらでも顔が知られているセリス嬢の交友関係の広さに驚く。
話を察するに、精霊士を抜きにしてもかなり偉い御方らしい。

「はじめまして、エディナと申します。よろしくお願いします」

「ほう、見た目に似合わず礼儀正しいじゃないかい」

やや引き気味に自己紹介をすると、皮肉めいた台詞が返ってくる。
そんなに、冷たく映るのだろうかと苦笑してしまう。
たしかに可愛いらしい見た目ではないが。

「冗談さね。さて、何をお求めかね嬢ちゃん」

ぱちりとやけに似合うウインクをして表情を柔らかくするアイラさん。

彼女なりのお茶目な冗談だったらしい。
おそらく緊張が顔に出ていたのだろう。
苦笑を表に出し、配慮に内心で感謝して、必要なものを告げていく。

「工房の炉心用の炎石と風石、飲用とで静水石を幾つか、明かりに灯石、……このくらいかね」

「はい、それでお願いします」

「よし、取りに来るのは店が出来てからでいいからね。設置に関してはまぁ、若いのをよこしてやるとするさ。それぐらいは大丈夫だろう」

流石というか、精霊石は高かった。
覚悟していたより掛かっていたが、払えない額じゃない。
一回入れれば、ほぼ永久的に使える事を考えれば寧ろ安いぐらいだ。

しかし、この金額のものを買うのにあっさりだな。
それともこれが、普通、じゃないよなぁ……いくらなんでも。
それだけセリス嬢の信頼が厚いってことなのだろう。
いやはや、今日の晩飯はフルコース御馳走確定かな。

「ギルドの嬢ちゃんの紹介だし滅多なのじゃないだろうしね。とは言っても安くはないし値引きは一切しないからね」

「それは、もちろん」

「安すぎてもありがたみにかけるし、安易に手に入るものは人は大事にしないからね」

ごもっともである。

ある程度は苦労して然るべきだと言うアイラ婆の意見には賛成だ。

尤も、いきなり大金を持っていた俺はどうなのかと聞かれれば返答に困るが。

そこは、十年間やり続けた苦労とこれからの不慣れな生活で帳消しという事で。

第６話：エディナさんのお仕事２（後書き）

あーつーいぞー……

暑さにやられ気味です、Ｋｅｉです。

婆さんキャラきた！

これで勝つる……！

そして文章が薄い！

このままではいけませんね。

今日はオフなので、じっくり文章を書き溜めようと思います。

第7話：エディナさんのお仕事3（前書き）

気が付けば一週間振り。
停滞していましたが復帰します！

第7話：エディナさんのお仕事3

「最初からだって？」

「おいおいマジかよ！」

「これまでの苦労はなんなのよー」

「優先参加権だけとかマジキチですねｗｗ」

ＶＲ化に伴い、完全リセット。

十年間走り続けた者にはあまりにもな事実。

非難囂々だった。

そんな中、開発元のＳｏｌｄｅｒｔ社は一つの声明文を発表した。

［あなた方のこれまでのプレイ時間は本当に無駄なのか？今までの経験が無価値だと何故言い切れるのか。プレイヤーの矜持とはそんなものなのか？］

傲岸不遜。

ここまで言い切る会社もいないであろう。

この発言に大いにユーザーは発憤した。

しかし、逆にヘビーユーザー達は大いに熱を高ぶらせる。

「上等だ」

そうまで言われて引き下がれる廃人（一流の猛者）達ではなかった。

それが結果的にどのような事態に繋がるかを知らぬまま、

虎視眈々と開始の刻を待っていた。

〈第7話：エディナさんのお仕事3〉

お店ができたよ

夕暮れに染まる街並。

無事、大きな買い物は終わった。
後は二日後、店の改装が始まるまで待つのみ。
正直今はまだ、やる事がないので暇である。
といっても細かく必要な物、工具類や生活用品などもまだなので残りの二日間はその辺りを中心に自分で店を探索してみようと思う。
あと、勿論忘れてはいけない金属の材料も。

セリス嬢に頼みっぱなしは情けない……日本男児として！
いや、まぁ、今は男じゃないんだけどね？
決して、セリス嬢に頼むとファンシーなおへやになるだろう事態を嫌って一人で行くわけじゃナイヨ？
ホントダヨ？

「うまー！」

「美味しいわ……！」

という訳で、御待ちかねの。
今日の本題。ばんごはんである。
ガルルガと呼ばれる竜魚を一頭丸々と使ったお造り。
生で、刺身なんて物が食べられるとは思っていなかった。これは嬉しい。
そして、その横にはレフトサンドの特大なハサミがほかほかと湯だっている。
身から、濃厚そうなミソまでしっかり堪能するつもりだ。
極めつけには、バックスタイガーと呼ばれる高級肉のステーキ。
なかなかレアな食材らしく、此所のオーナーシェフに粘り強い交渉をした結果獲得した逸品である。
もちろん、汁物や箸休めもあり、食後にはデザートも着いてくるという。
どれも、上品さよりも素材本来の旨さを重視した取り合わせなのは、個人的な趣向であるのは否めない。
一回の食事としてはかなりの出費だが、セリス嬢へのせめてものお礼である。

「久しぶりに食べたわ。ガルルガもバックスタイガーもあまり出て来ないのよね」
満足気なセリス嬢。
そう言ってもらえるとなによりだ。
こちらとしても、イタチョーに交渉したかいがあるってもんだ。
なにをやったかって？
具体的にはイタチョーサンの前に立ってひたすら口の端から透明な液体を流し続けただけだよ？
親切だよね、イタチョーさん！

「満腹満腹……もう、俺、このままいっちゃってもいいよねー」

「今回は分からなくもないわね。ちょっと食べ過ぎちゃったけど、いいわー」

大喰らいとはいえないセリス嬢も、この間よりかなり多く食べていたのだからその味がしれるというものである。

しっとりと頂くのは嫌いじゃないし、そういうのも大いにアリだけどやっぱり食事はがっつりいきたいよね！

「ふう、いよいよか」

そんなこんなで、残りの二日間は街の各所をまわって行った。

途中、おいしそうな串焼きを食べたり、作業に使う道具を調達したり、おいしそうな果物を食べたり、日用品を謎袋に買って詰め込んだり、おいしそうな煮込み料理を食べたり、おいしそうな、……

……あれ？

そして。
今日はいよいよ、待ちに待ったお店の改装日だ。
はやる気持ちを抑え、いつもの服に着替える。
今日はシャツの糊も三倍増しに効いている。パリッパリだぜ！
顔を洗う洗面台にて身だしなみチェック。
今日も銀色の髪は鍛え上げられた筋肉、失礼。
上質な鋼のごとき艶と、絹糸のようなすべらかさを誇っている。
このさらさら感、正に世界がしっt……。
さて。
ぴぴっと素早く前髪を整え、昨日買ってきた装飾の少ない普通の細長い布（リボンと人はいう）で後ろの髪を纏めて括る。
……よし！初めてにしては上出来だ！
ちょっと、不格好だけどこれも練習のうちだ。
別に結び目がばらばらとか気にしてはいけない。

準備を整え、いざ出陣！

大分見慣れ始めてきた街並を眺めながら歩く。
今日も今日とて街は活気に包まれている。
時に、食べ物を商う露天を冷やかし、時に鍋からの香しいかおりに身を釣られつつ、目的地へと向かう。
ちなみに、この身体の使い方も慣れてきてバランスの取り方をマスターした。
故に、念願だった颯爽と風をきって歩く事が出来ているのだ。

「ふっ、……ふふふっ」

思わずしたり顔になってしまうのも仕方が無いと思う。
これぞ仕事のデキる上司！といった感じなのだから。
これで、女の子にもモテモテだぜ。わほーい。
うむ、調子に乗りすぎていたようだ……俺、自重。

中央広場を東に越え（大きさ的にかなり広いので誇張に非ず）、東地区へ。
少し歩いた所で路地を右に曲がる。
ちょっとした人だかりが出来ている場所へと足を進める。

「おはようございます」

「あ、おはよーございまーす！」

見た目はボロい建物。
そこに集まっていたのは勿論、今日改装を行って下さるバーンスタイン商会の皆様方である。

「早いですね、もう始まってるのか……」

「大仕事ですからね。みんな気合い入っちゃいますよ！」

「それは、それは……」

頼もしいかぎりである。
巷で有名な幽霊館なのに全然物怖じしていない。むしろ、幽霊も退散するぐらいの物を仕上げてやるぜ！

と、現場のいかにもな親方風のおっさんが逆に張り切っていた。
いや、彼女に逃げられると困るのですが。
主に俺の癒し的な意味で。
見た所、他の作業員達もそんなに気にしていないみたいだ。
幽霊といっても、怖がってばかりではないらしい。
まぁ、あの娘かわいいしね！あの娘かわいいしね！

「じゃ、私も作業に入りますね」

「了解。俺は、適当なところにいます」

さて、工事が始まった。
といっても、自分に出来る事などないのだが。
取りあえず、今日働いてくれる方々に軽く挨拶とお礼を言ってまわった。
みんな気さくに笑顔で応えてくれた。
良いね、こういうの。実にイイ。

それから先は、ひたすら待つだけである。
途中ここはこうなるんだが大丈夫か、と聞かれるぐらいだ。
うむ、問題ない。
ないのだが、それにしても暇だった。
木槌の音や、風の魔導を仕込んだ鉋をかけている音が響く。
あ、鳥が飛んでる。
平和だなあ……。

「出来ましたー！！」

「おおー！」

昼に休憩を挟みつつ、迅速かつ正確な仕事をしてもらった結果、陽が暮れない内に無事完成と相成った。
凄まじい仕事っぷりだ。
後は、家具や調度品、そして忘れてはいけない各種精霊石を取り付ければ完成である。

「どうもー、おっ、ぴったりのタイミングみたいやね」

不意に、後ろから陽気な声が聞こえた。
振り返るとそこには、開いているのかわからいくら糸眼が特徴的な若者がいた。
背にはでかいリュックを背負っている。

「ちわー、アイクシルコラードからのお届け物でーす。あんさんがエディナんでよかったんかな？」

「エディナん？」

どうやら渾名らしい。
初対面の相手に随分フランクというか。
呼ばれて嫌みがないところ、彼は誰にでもそうなのだろう。

「君がアイラさんの言ってた使いの人かな？」

「せや。ユーリックいいます、よろしゅうたのんますわ」

どうやらアイクシルコラードから派遣された人物は彼の事らしい。
実にタイミングの良い登場だ。
そんな彼を見た第一印象はなんというか胡散くさい感じ漂う容姿

をしてる割に、普通の青少年って感じだ。
悪い奴ではなさそうで安心した。

「こちらこそ、よろしく」

「はいな。バーンスタイン商会の皆さん方、もう始めても良いやろか？」

「はいはーい。勿論大丈夫ですよ！」

「ほな、入りまっか」

そうして、作業を終えぽけーとしてた元気娘さんを案内人に俺達は建物の中へ入ってゆく。

「おぉ……！！」

良い仕事してますねー。
正にそういった感想だった。
剥がれ放題の壁は綺麗に塗り直され、床も張り替えられた。
割れた窓もガラス板が嵌め込まれ、外からの光を霞む事無く建物内へ送っている。
以前にはなかった扉が増え、そこから工房、住居スペースへと繋がっている。
まだインテリアがないのでやたら広く見える店のフロアを抜け、先に工房へ。

こちらも素晴らしい完成度だった。
風通しの良さそうな作業場、大きさをたっぷり使った大窯。
武器の試し振りが出来そうな程広い立派な工房。
耐火、耐魔法加工を施したレンガ作りの此所は、俺の理想を体現したかのようなものだった。
やばい。
こんな所で剣が鍛てるなんて。
知らず、身体がうずいてしまう。

「どうですか？私達の腕前は」

少女が自信たっぷりに聞いてくる。
誇らしげに胸を張るところから既に俺の答えは分かっているのだろう。

「嗚呼、最高だよ……」

それを聞いて、特大の笑みを咲かせる少女。
俺もこんな笑顔が仕事終わりに出来る様になりたいものだと思う。

「んじゃま、始めるでー」

空気を読んで黙っていた青年、ユーリックが声を出し場が再起動する。
窯の前に近づくとしゃがみ背負っていたバックを下し、中身をあさる。
ごそごそと紅く両手で抱えられる程でかい精霊石を取り出したユーリックは、

それを炉心の心臓部に丁寧に置く。
そして、片膝立ちになり今までの飄々とした姿に似つかない程真剣に祈り始める。

「数多の精霊達よ、我ユーリック　シュペルツィンの名の元に此所に誓う。我、力に驕らぬものなり。我等、精霊士は精霊の庇護下において全ての欺瞞なき信頼を寄せることを此所に誓う。今日の恵みに感謝を、アイクシルコラード　アイラが高弟の一つユーリック　シュペルツィンは精霊の助力を求めん」

祈りを終えた瞬間、紅い精霊石はまばゆい光を発生させる。
紅い精霊石を中心に粒子が飛び回り、発火したように炎が立ち上る。
パチパチと時折光の粒が弾ける音がなる辺り、火床というよりかは暖炉みたいな感じだがこれはこれで味がある。

「ふう、おっけーや」

暢気な表情に戻ったユーリックが大げさに額を拭うのを眼にして、思わず吹き出し隣の少女と笑い合った。
その後は、同じ様に水や照明用の精霊石を各所に設置していく。
二階は一階程広くはないが、一人で暮らすには余りあるぐらいの広さがある。
なにしろ、キッチン、リビング、簡易ながら浴室、寝室それぞれ別の部屋に使ってもまだ部屋数が余るのだ。
一つあの幽霊姫用の部屋でも作ろうかと一瞬本気で悩んでしまうくらいだった。

第7話：エディナさんのお仕事3（後書き）

もう梅雨明けたかな？
お久しぶり、そしてこんばんわ、Ｋｅｉです。

息抜きをしていたらいつの間にやら。
時間が過ぎるのは無情なものですね―　ω・、）
取りあえず、立て込んでいた幼女、間違えた。
用事も終わりましたので更新再開します。

補足
ＶＲ化の優先参加権は十年間どのぐらいゲームにて栄誉を手にしたかが、
選考基準になっています。
ただし、目立った功績がなくても、
プレイ時間の長さも栄誉の一つに入ります。
十年間欠かさずログインし続けた　＞ランカートップクラス
なので一概にただ強いだけでも選ばれなかったり。

第８話：エディナさんのお仕事４（前書き）

夕方になり、バーンスタイン商会が頼んでくれた寝室のベットに家具一式、工房に収納用の木箱、それと店のインテリア等が届き、配置の為に一旦外へ。

改めて入ると建物中はぐっと店らしくなっていた。

これで後は、商品を並べれば立派な店が完成する。

第８話：エディナさんのお仕事４

〈第８話：エディナさんのお仕事４〉
剣を造ってみよう

周囲を見回す。
誰もが手に黄金色の液体をジョッキに納め、今か今かとその時を

待ちわびる。
咳払い一つ。
「えー、では、名前もまだ決まっていませんが、皆様のお蔭でつつがなく改装、店の下地を作る事が出来ました。バーンスタイン商会、アイクリルコラード、そして此所には居りませんが各種インテリアを造ってくれた方々、全ての人達に感謝をしたいと思っています、有り難うございました。それでは、長い話しも何なので、……
……
乾杯！！」
「「「乾杯！！！」」」
かけ声と共にグラスの打ち鳴らす音が一斉に響く。
店内は一気に活気に溢れた。
夜の酒場、本日共に仕事を終えた（自分は突っ立っていただけだが）皆を集め、ささやかだが打ち上げをしようという事になった。
それほど大人数ではないが、店の一角を占拠出来るくらいの人数が思い思いに仕事上がりの充足感と達成感に浸る。
中でもバーンスタイン商会の面々は流石というべきか。
早くも酔っぱらいが誕生し始める程賑やかである。
「んぐ、……んぐ、ぷはぁー！！たまんないな！」
見た目と裏腹に豪快にジョッキを煽る青年。
「こくっ、こく……ふわー、ですね！」
両手で持ち、可愛らしくもとんでもないペースで杯を空にしていく少女。

俺は騒ぎの中の一つの机に、ユーリックと元気娘さんと卓を囲んでいた。

「んく、……ふぅ。たまんないな……」

それにしてもこの二人、呑むわ飲むわ。
俺も酒に弱い方ではないがこの二人程ではない。
次々と運ばれる蜂蜜酒を尻目に、つまみを肴にゆっくりと味わう様にグラスを傾ける。
お酒は静かに、食事は烈火の如くが俺の心情である。

「あ、店員さーん！こっちも追加でー！」

「こっちもや！エディナんも呑みぃやー」

「わかったわかった。少し落ち着け」

夜はまだまだこれから。

程よい銘酔感に包まれながら道を歩く。
路地を曲がり行き着いた先は一つの建物。
今日から俺の住居。そして店となる予定の物件である。
ぴかぴか新品の木製の扉を開け中に入る。
まだ売り物一つない店内は少し不思議な佇まいである。

薄暗い床を確かめる様に踏みしめ、奥の扉を開け二階へと続く階段を昇る。
そのままリビングを通り抜け、ベットルームへ。
着替えは、明日でいいや。
謎袋等持ち物を机に置き、ベットへと倒れ込む様にダイブ。

「おー、ふかふか……」

ぼすり

高級ホテル並なんて事はないが、そこそこに寝ごこちの良いシングルベット。
新品のシーツは肌触りが中々いい。
ぐるんと、仰向けになり呆けたように天井を見つめる。

「此所が今日から俺のいえかー……」

有り余った資金のお蔭でここまで順調に来れた。
だけどこれからは。

「……」

これからどうなるのか。
取りあえず、剣を鍛ってみるつもりだけど。
本当に、俺に鍛冶が出来るのか。

「……やるしかないかな」

今更か。
ここまでお膳立てされたんだ。

先行きなんてわからないし、やってみるしかないだろう。

「明日は明日の風が吹くってね。これ、意味あってたっけ……
……？」

りぃん

「……これから、よろしくね……」

ここまで光で先導してくれた我が家の姫に感謝を込めて優しく頭に当たる部分を撫ぜる。

嬉しそうに一鳴りして飛んで行く姫に満足し眼を閉じる。

身体に染み渡ったお酒の効果か。

そんなにかからず、眠りについた。

「うにゅう……くあっ、……ふぁあ……」

翌朝。

窓からの光に自然と目が覚める。

元々、朝型人間であったので朝に起きるのは苦痛ではない。

ただ、低血圧なのでいまいちパッチリとした目覚めは一度もないのだが。

「……」

「……」

「……あさか」

回らない頭を活性化させる為洗面台へ。
元の世界の蛇口にあたる所にある、静水石に触れる。
軽く光り、どういう原理なのか流れ出す水を桶に貯めて顔を洗う。
鏡代わりの鏡面に映る美人さんに朝のご挨拶。どうやら、俺らしい。
まだ、寝惚けていた。
あくびを噛み殺しつつ所々はねた髪を整え、布で結い上げる。
ぴょこりと僅かに覗くしっぽを確認してベットへ。
ちょっと皺になった服を身体を見ない様に着替え、脱いだものを謎袋へ。
汚れはこの中に入れれば消えてしまうのだ。ファンタジーばんざい。
傷は消えたりしないので、破れたら縫うか新しく買い替えなければいけない。
そのせいか解らないが少し生地が弱い気がするがそれは我慢だろう。

「さて、始めようか」

場の空気が変わる。
水場の水滴が落ちる音すら聞こえそうな程、静かな空間。
此所は工房。
それすなわち仕事場。

「マエストロ」
職人、親方の意味を持つ詞。
最古参の鍛冶士として第一線を走るプレイヤー達に武器を造り続け、いつしか付けられた二つ名。

いつも巫山戯ている自覚のある俺だが、この時ばかりは話が変わる。
この状態の俺は別人の様になるらしい。
言葉を発さず、表情を変えず。
ひたすらに剣を鍛つ。

まるで人が変わったかの様だ。

と評したのは普段の俺を知る、旧知の悪友だ。
伊達や酔狂でもなんでもない、十年間ひたすらやり続け来た、
［Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ］　随一の名工と謳われた

腕を。
その経験が今試される。

「……」

袋から鉄材を取り出し、起動させた火床へ。
今回使用するのは極普通の隕鉄だ。
質は良くはなく、悪すぎではないクラスのもの。
最初だし、欲張っても仕方がない。

「……ふぅ」

精神を集中。
周りの景色が、徐々に薄くなる。
視えるのは燃えさかる釜、熱せられ融解した金属の固まり。
手には、握りなれた様な、今日初めて握る槌。

「……」

ここからは正真正銘、本当の鍛冶だ。
ゲームの様に画面越しではない。
触れれば焼けつく様な熱と、金槌を一振りする毎に変化する金属。
手法は全て解っている。
実際の作成方法を完全に再現した「Ｍａｓｔｅｒ　ｏｆ　Ａｒｔｉｓｔ」でやっていたのだ。

真面目な話しをすると。
武器とはつまるところ、凶器だ。
その刃を振り下ろせば、対象の生命を終わらせる。

身を守るとか、誰かの為とかそういったものは言い訳にすぎないと思う。
別に活殺という概念を馬鹿にしているわけではない。
騎士という者達を虚仮にしているわけでもない。
ただ自分が造る物は人であれ、モンスターであれ、クリーチャーであれ。
意志をもって自分の武器が振るわれるのだと言う事を忘れないでありたいのだ。
それを心に留めておかなければ、俺には鎚を振るう資格がない。
俺が造るものは展示品ではないのだから。

以上の事を含めて。
俺が、今の俺がどこまで出来るのか。
この世界で鍛冶士として銘乗りを上げられるのか。
恐れも不安も、震えるような期待も歓喜も。

「やるか……」

万感の意を込めて最初の一振りを下ろした。

第８話：エディナさんのお仕事４（後書き）

アイスキャンディーにハマってます。
日の出を迎えるのが日常になってきました、Ｋｅｉです。

やっときた。
エディナさんの鍛冶シーン到来です。
ふっふっふ、食事するだけがこの小説ではないのだよ。
比率としては７：３ぐらいでいこうかと思っています。
どっちがどっちかは勿論読者のみなさまはご存知ですよね？

次回もエディナさんｉｎマエストロｖｅｒで彼女の素敵さを
全面に押し出していきます。

第9話：エディナさんのお仕事5

「模様鍛接」

北欧で生まれた鍛冶技法。
多数の鉄板を炭火の中で焼き、赤熱状態を保ったまま熱する。
すると鉄片は炭素を吸収して表面が鋼になる。
この鉄片を刻んで寄り合わせ、平に延ばすように鍛え上げる。
これを何枚も繋ぎ合わせ、また鍛え上げ、武器に仕上げていく。

剣身には鋼化した鉄と通常の鉄が混じって蛇のような大理石模様を描く。
物語に出てくる聖剣の類はこの製法によって造られたと云われている。

〈第９話：エディナさんのお仕事５〉
工夫を凝らしてみよう

頭では理解していた。
やはり生身での鍛冶は少し、かなり勝手が違ったがどうしようもない程お手上げではないのは救いか。

「……」

冷静さと大胆さ。
遅くなっては熱が引いてしまい駄目になる。
焼ける様な熱さを掌握し、ひたすらに鎚を振るう。

「もう少し、……強く……
……」

下鍛、上鍛、素延、火造。
鍛えたものを刻み、寄り合わせまた鍛える。
時に視点をずらし斜めから見たり、自分の持つ知識を動員して仕上げてゆく。
何十回目かの折り返し鍛錬、造り直しを経て、漸く剣身が出来た。
荒研ぎをして形を整え、土取りと呼ばれる焼刃土を剣身の中心から鍔にかけて薄く塗り、刃との色の差異を生み出す。
次が最大の山場だ。
土が乾燥する間に呼吸を落ち着け、精神統一をする。

焼き入れ。
加熱した剣身を水につける事で刃を硬化させ切れ味を出す手法。
実際に、つける時の水温を確かめようとして、入れた手を切り落とされた鍛冶士もいたらしい。
それくらい、焼き入れの作業の重要性と機密性が見て取れる。
鍛冶の難しさは鎚を振るうのでもなく研ぎでもなく、焼き入れである。
ここで鍛冶の腕前が出るといっても過言ではない。
熱する炉の温度、剣身の温度、つける水の温度。
どれが一つ狂っても今までの作業が台無しになってしまう。
また、入れる時の角度も大事なのだ。
放り投げる等言語道断。
素早く、丁寧に。

「……」

まだだ、まだ早い。
もっと。
もう少し。
水温は適温に保たれている。

赤熱する剣身。
待つ。
その一瞬を。
産声を上げるその時を。

「……今っ！」

「ふわぁあああ、もーげんかーい……」

最後の一本の焼き入れが終わった。
炉を止め火が精霊石から消えるのを確認して、その場に寝転がる。

「……」

初めての鍛冶は思った以上に疲れた。
でも。

「やりきったー、ってなぁ」

胸に広がる充足感はたまらない。

この満足感はこの世界に来て、大なり小なり溜まっていた鬱屈を飛ばしてくれた。

安心した。やれば出来るもんだ。

一時期、余りにリアルなので鍛冶の勉強に実際の工房を見学させて貰ったり。

実物の日本刀の鑑定士に頼み込んで目利きを教えてもらったり、博物館巡りをしていたので、ある程度の目利きが出来る。

今回、俺の鍛ったものはゲーム程の完成度はないが、かなり良い線をいっていた。

自分なりに一つ一つ手抜きなしに丹誠に造った自慢の子達（武器）だ。

これなら売り物として出せる。

開け放った窓からのひんやりとした風が疲れた身体に心地よく流れる。

地面の冷たさと風の涼しさに身を任せ、瞳を閉じた。

「むむ……」

暫く余韻に浸った後。
新たな問題に俺は直面していた。

「う、流石にまずいかな」

灼熱の中作業していた為、汗を大量にかいていたのだ。
作業着代わりのシャツには汗がべっとり。
涼んでいたので汗じたいは大分引いたが、ちょっとカホリがキツいという現実。

「そういや、風呂入ってなかったなぁ」

この世界に来てもう一週間くらい入っていない計算になる。
そりゃ、そんな状態で汗だくになれば体臭も気になる。

「うー、汚いのは嫌だけど」

なんでそんなに嫌がるのか。
決まってるじゃないかブルータス。
お風呂に入ると自分はどうなる？
全裸でぃすよ？
マッパですよ。
あちらこちら触らないといけないんですよ。
役得とかそんなのは他人の場合です。

「はぁ、諦めるしかないか……」

気分はドナドナの子羊です。
もう眼の前にはバスルーム。
このまま放置して知り合いに会う訳にいかないので、憂鬱な気分のまま服に手を掛ける。
魔法少女並みの早着替え、早脱ぎをして中へ。
バスルームといってもシャワーがくっついているだけの簡素なものだが。

シャー

ぽんと精霊石を軽く叩きシャワーを出す。
ざーざー流れるお湯を頭からかぶる。

「あー、これ、嵌まりそう……」

なにかって。
凄く気持ちがいいのだ。
びっくりするぐらい落ち着くというか。あふれる爽快感というか。
不快な汗が流れる感じといい、肌が水を弾く度疲れが取れるような感覚がある。
風呂がそこまで好きでもなかった俺だが、温泉とか長風呂とかを好む友人の気持ちが分かった気がした。

「……」

ふと、視線を降ろす。
ここまで来たら、身体を洗わなければならない。
髪だっていつまでも放置したら痛んでしまうだろう。

あの艶は無くすのは惜しい。

「……ごくり……」

視線の先には、まんまるなマシュマロさんが二つ鎮座しておられます。

恐る恐る、手を上げてそこに触れる。

ふにゅん

「さ、さわった。おれ、女のむむね触って……」

思ったより柔らかい。

それでいてハリがあるというのか、途中で押しかえしてく感触。

いかんいかんいかん。

頭をぶんぶんと振り、見ないように手探りで乱暴にならないように優しく洗ってゆく。

途中なにかひっかかった所に触った時はつい驚いて奇声を上げてしまった。

オレハナニモミテイナイ、トッキナンテシラナイ。

「んっ、く……ふっ……だ、だぁ！なんで声がでる！？ただ洗ってるだけだぞ？！」

こうして、異世界初風呂はシャワーの快い暖かさと妙な疲労感を残して終了した。

ついでにマイサンはやはり時空の彼方に旅立ったようでした。

当然の如く、風呂上がりの俺は身体の隅から隅まで茹で蛸でしたとさ。

第９話：エディナさんのお仕事５（後書き）

海っていいよね！
今年の夏は泳ぎにいきます、Ｋｅｉです。

皆様お待ちかねのサービスカット。
やはりＴＳものを書く以上ここは外せない。
地味に鍛冶シーンを食ってる感がしないでもないですが。

第１０話：エディナさんのお仕事６

「あっ」

「どうしたんだい？」

「そういえば」

「ふむ、そういえば？」

「店の名前付けるの忘れてた」

「……」

「……」

「はぁ、全く君は……」

「い、いやそんな哀しいものを見る眼で見なくてもいいだろ！？」

「……はぁ」

「おい」

「で、なんていう名前にするんだい」

「スルーですか無視ですか」

「さっさとしたまえ、屋号を付けるのだろう？」

「屋号って、……まぁいいや。そうだな……」

〈第１０話：エディナさんのお仕事６〉

開店しました

さて、いよいよこの時がやってきた。
有り余った資金の賜物で頓挫せずにこぎ着けられた。
とはいえ楽観視はできない。
店を一つ、まともに作るのは莫大なお金を必要とする。

「ご都合主義も楽じゃないよね」

今直ぐ餓える事はないが、それでもなにもしなければ増える事はない。

「しかし見よこの燃える展開、ってか」

早朝、既に街は動きだしている。
道ばたに風呂敷らしきものを広げ商品を並べてゆく者。
お使いなのか、小さき見習い少年が街を走ってゆく姿。
既に開店準備を終え、客引きを始める商店もちらほらと見える。

カウンターには昨日作ったお手製の金属の看板。
文字にちょっと葉っぱと一輪の花の彫り飾り模様がポイントのお洒落な看板である。
これを店の表に掛ければめでたく当店も開店と相成る。
早起きして丁寧に拭き上げた店内は、全てが新品である事も相まって一つの汚れも見当たらない。
見回して、満足気にこくこくと頷く。

「よしよし」

看板を持って表に。
今日も天気は快晴。
ここでも変わらない太陽の眩しさに眼を細める。
扉付近に予め打ち付けておいたフック部分に引っ掛けるように付ける。

「さて、お客さん来るかね」

武具専門鍛冶屋「モルガーナ」本日開店します。

「いやはや」

それにしても来ない。
当たり前の事では有るが全く人が来る様子がない。
そりゃね、一応今まで面識のある人達にはそれとなくお店開きますよー、とは言ってたけど。

「初めだしな。千客万来なんてある訳がないか」

皆冒険者とか荒事向けの人じゃないしね。
唯一剣を振るのが居るけど騎士サマだし。
お抱えの所とかもう有るのだろう。

「果報は寝て待て。気長にいきますか」

一応、街でのミステリースポットに店を構えているのだ。
宣伝としては面白味があっていいだろう。
窓からのやさしい陽に、ぼへーっとカウンターに頬杖をつきながら来客を待つ。
ああ、因みにウチの看板娘の姫も一緒にお待ちしています。
今は店内を興味深げに飛び回ってますよ。

「……」

りぃん

「……」

りぃん

「……むにゃ」

途中うっかり、お昼寝しそうになったのは此所だけの話し。
つい、わくわくして眠れず、徹夜したとかいうのは嘘か真か。

「来ないな」

りぃん……

「ありがとう、姫。でも逆に優しさが眼に沁みる」

りぃん……

太陽が頂点に位置している時、気分転換に昼食を取りに一旦店を閉めて街に出た。
一応行く先々で宣伝らしきものをしてみたので、これからに期待だ。
なんて思い戻ってきたのだが。
相も変わらず客足は遠のくどころか近づいてすらこない。

「やっぱり、初日からは厳しいか？」

りぃんりぃん

「そんなことないよ、ってか？」

りぃんっ

「うん、そうだな。前向きにいかないとな！」

りぃんっ

落ち込みそうになったが、姫の励ましを受け持ち直す。
それに、此所までが順調過ぎたのだと思えば納得できる。

「とは言ってもなぁ。お客が来ない事には始まらないからな」

どうしたものかと唸っていると来客を告げるドアベルが鳴る。
それにしても、今日の昼食も旨かった。
最早、あそこの店の常連となりつつあるぐらいだ。
パリパリしたあの揚げ物みたいなやつ、さっぱりとした付けダレにつけて、

「あのー、すみません」

嗚呼、あの口に広がる爽やかな酸味とジューシーな肉の味わい、

「タマリマセン」

「あのっ！無視しないでくださぃー」

「っ！」

おおっと、つい妄想が。
お客の前でなんとはしたない真似を。
急いで口元を拭う。

「これは申し訳ない。いらっしゃい、なにか御用かい？」
仕切り直しとばかりに眼前の少女に微笑みかける。
ごまかせない先程までの奇行に曖昧な笑みを浮かべる少女。
見つめ合うこと暫し、あちらから話しかけてくる。

「あ、あの。ここは武器を扱っているんですよね？」

「もちろん。剣から槍に、斧、弓に暗器までなんでもござれ。オーダーメイド（特注）も承っているよ。尤も、杖（ワンド）は扱っていないからお客さんには畑が違うかな？」

ちなみに口調が敬語でないのは、荒くれ連中に嘗められないようにといった、極小心者な考えの元である。
別に某冒険者斡旋酒場の代々同じ名を持つ主人を参考にしようとか真似ているとかそんなことは決して到底ない。
気分は出来るキャリアウーメンズ。
オスカル様と御呼び！

「いえ、これでも私近接戦闘が得意なんです」

「ふむ？あぁ、なるほど」

よく見てみると身長が小柄ではあるが、外套の隙間から覗く腕などは引き締まっていた。
それに手には血豆を潰した跡が見える。
かなりの修練を積んだ、どこまでなのかまでは分からないが、かなりの猛者であることは理解できる。
こう、ゲーム内でも一流と呼ばれる者はオーラというか何処とな

く佇まいが違うのだ。
これでも数多くのトッププレイヤー達を見てきたのだ。間違ってはいないと思う。
尤も、ゲームと現実を混合するのは可笑しい事ではあるが、現状が既におかしいのでその辺りは気にしない事にする。

初見で分からなかったとは、まだまだ検眼を磨く必要が有るなと自分の新しい課題に唸りつつ、さてなにを見繕うかなと別の場所で頭を回転させる。

「重ね重ね失礼をしました。それで、お眼鏡ねに叶ったものは見つかったかな」

「もちろんです！えーとですね。どれも不思議な模様をしてますよね」

「ああ、それは」

好奇心に眼を輝かせる少女に説明しようとしたが姿が見えない。
否、視界の上に浮かんでいた。

「なにをやっているんですか、総団長」

少女を浮かべ、正確にはつまみ上げていたのは見知った騎士の鎧を纏った男。
カーグの奴がそこにはいた。

「あっ、かーくん。見て下さい、どれもこれも綺麗な誂えですよ！」

驚きもせず、ひらりと掴まれている手から脱出した少女は華麗に

着地。
両手を振り回さんばかりに熱心に眼前の男に話しかける。
実に微笑ましい光景だ。
それとは別に、気になる単語が出てきた気がするのだが。
「総団長？」
あれか？もしやエラいヒトだったりするのか。
カーグの奴の上司だったりするのか。
少女上司。悪くない響きだ。
「はい、こう見えて偉いんですよ私。それと……」
「……」
「……」
カーグの奴からこちらに視線が移る。
こちらを凝視する少女。
「……」
いまいち、要領は掴めないがこれは俺の精神力（タフネス）を量っているのだろうか。
ならばと、負けじと見つめ返す。
美少女のガン視。正直役得です。
「……」
「……」

「……」

「……」

と、向こうの眼がキュピーンと光るのを感じる。
くっ、そういうことか。
気付くのが遅れるとは！
ならば、せめて先手をっ。

「ご挨拶が遅れてすみません。いつもうちの不肖の息子がお世話になっております」

「いえいえ、こちらこそ息子さんには助けてもらっています」

「わたくしカーグの母のエディナと申します。よろしくお願いしますわ」

「こちらこそ。聖十三騎士団総団長のリーゼ　ローランドです」

「まあ！こんな綺麗で気だての良い方と一緒だなんてうちの子は幸せ者ね」

「あらあら、いやですわお義母様。」

「まぁ、お義母様だなんて！おーほっほっほっほほほほ」

「うふふ」

「おーほっほっほほほほほほ」

「うふふ、くすくす」

ゴスッガスッ

「「痛っ……！？」」

「なにをやっているんですか団長。お前もだ、おかしな小芝居をするな。ダレが息子だ誰が」

額に青筋を浮かべこちらを睨むカーグ。

怒り心頭な奴に、煙りが立ちそうな程見事なげんこつを喰らい踞る俺とリーゼさん。

そう。リーゼさん、なのだ。見た目少女を通り越して、幼女だがどことなく彼女は年上臭がする。

「かーくんひどいです！私はただお義母様にご挨拶をと」

「かーくんひどい！おかあさんを叩くなんて、いけません！」

「ダマレ」

「「すみませんでした！！」」

ドスの聞いた声が響く。

その視線、絶対零度を冠する位のものだった。

速攻リーゼさんとザ土下座タイム。

ちょっとしたお茶目じゃないか。

全く、肝の小ささは相変わらずだな。

「何か考えたか？」

「「いえなにもかんがえておりませんデスはい」」

だから、紹介したくなかったんだ。

疲れ切ったように息をつくカーグ。

その肩をぽんぽんと慰めてあげるウチの姫。
あー、もうかわゆいなぁ姫は。
「それで、お前はどうして此所に？」
「……この人が暴走しないようにお目付役をまわされたんだ」
どうやら本当にエラい御方らしいです、こちらの幼女さんは。
「別にいーじゃないですか。仕事は片付けてあったんだし」
可愛らしくすねる見た目幼女。
演技であるのは丸分かりだが、その仕草は憎めないものがある。
そうしている内にも、カーグの奴の説教はヒートアップする。
お前は何処の小姑だ。
そしてそれに対し、にこにこと笑みを崩さないリーゼさん。
どうしてそんなに平気なのか。自分事でない俺が既にげんなりしているのに。
彼女は間違いなく剛の者だ。
「だからって、勝手に城から抜け出さないで下さい。だいたいですね……」
「もう。男の子が細かい事を気にしない。そんなだから「鉄面皮の鬼隊長」なんて呼ばれるんですよ？」
なにか、ご大層な渾名が出てきたぞ。
俺からしたらただのむっつりな奴なんだけどなー。

「それに、かーくんと妹さんがお薦めするお店ですもん。見に行くしかないじゃないですか」

「お薦め？」

「妹から聞いたらしい。言っておくが、俺はなにも話していない。全く、セリスの奴次にギルドに行ったらきつく口を閉じさせないとな」

隣に視線をずらすと、そっぽを向いたカーグが答える。
どうやら、妹さんと総隊長さんは面識があるらしい。
ギルドのセリスって……彼女の事だよな。って、え、セリス？いもうと？

「お前の妹って、セリス嬢だったのか！？」

「そういっただろ？」

本当らしい。
そういえば、前にそんなことを聞いた様な。
にしても、な。
こんなのとあの性格はちょっとあれだが、美人で良い娘なあのセリス嬢が兄妹。

「うわぁー、に「似てなくて悪かったな」……いや、先言うなって」

流石エスパー。
心理戦では分が悪いようだ。

「ふん、自覚ぐらいはしている」

「まぁまぁ、かーくんはかっこいいですから大丈夫ですよ」

不機嫌そうに鼻を鳴らすカーグを諌めるリーゼさん。

そうだろうか。

俺からしたら、ってこれは二度目か。

「もういいですよ。それで、決まったんですか」

脱線どころか他所の国まで飛んで行ってしまった話しを元に戻すカーグ。

どうやら諦めたらしい。

うむ、人生前向きなのは良い事だ。

「もちろん！これにします」

そういって満面の笑みで彼女が取り出したものを見て、俺とカーグの奴は大いに顔を引きつらせる事になる。

第１０話：エディナさんのお仕事６（後書き）

お久しぶりです。
また夜に投稿しに来ますが一先ずこれを。

美幼女でエラくて、大人なレディ。
まさに完璧ですねリーゼ団長！
彼女は一体何を買うのやら。

そして二度目の登場カーグくん。
相変わらずのモブ臭ですね。
あれです。きっとリーゼ団長にジェラシーを感じているんです。
彼はいい子なんです、ちょっとキャラが薄いだけで。
そう、ただ頑張ってるだけなんだと思うんです。

お店の名前。
分かる人には分かってしまうでしょう。
成る程と、納得していただけると作者がニヤニヤと嬉しがります。

第１１話：エディナさんのお仕事７

「またあんたか。何度も言うが、俺は鍛たん。他を当たってくれ」

「駄目だろうか？」

「無理だ。俺は決めているんだ、あんたらは客にしないって」

「また来る」

「無駄だと思うんだが。あんたなら鍛ちたいと言う連中が五万といるだろ」

「俺はお前の剣が欲しいんだ」

「だぁー、もう。集中できねぇんだよ！」

「なら、早く俺のを鍛ってくれ。そうすれば消える」

「こいつ真剣でうぜぇ……」

「俺のはまだか？」

「一生有るか！この、根暗陰険ガチホモ変態野郎」

「なっ、ふざけるな！俺は至ってノーマルだ」

「ガチホモー、へんたーい」

「貴様こっちが下手に出てれば、言いたい放題言いやがって。お前こそ変態だろう」

「なんだと？」

「そうだろ。この、男好きの女装趣味が」

「誰が女装趣味だ！そして、俺は綺麗なお姉さんがタイプだ！上手い事言ったとか思ってるガチホモに言われたくはない！！」

「良い度胸だ。ログアウトしたら覚えておけよ」

「こっちの台詞だ」

「「けっ！」」

〈第１１話：エディナさんのお仕事７〉
なにごともやりすぎは禁物です

「これにします！」

そう言った彼女が持っているものを見て俺は頬をひくつかせた。
横に居るカーグの奴は何故か頭を抱えている。
いや理由はわかる。
今回はこいつに同意出来た。

彼女が持っているもの。それは斧だった。
しかし、ただの斧ではない。
身の丈、２００セント　（１セントは１ｃｍ）は有るであろう大斧。
スラッシュハーケンといった方が正しい戟斧型で刃部は５０セント。
ちなみに彼女の上背は１４０セント程。
明らかすぎる程のサイズオーバーだ。

「あー、いくらなんでもそれはどうかな」

ちなみにコレ。
巨人族。
ゲーム内ではユミル族、ユミルと呼ばれていた者達用に（此所での実在云々は置いておいて）作製したものである。
間違えても人間（ヒューマン）用ではない。
数十本鍛った中で何故彼女はそれを選んだのか。

「……」

いや、もんっのすんごいキラキラした眼で見られてますよ。
これは間違いなく。

「ロマンか」

「ロマンです！」

成る程。
彼女の思惑がだんだん分かってきた。
となれば、俺の回答は一つ。
「分かった。お売りしよう」
「本当ですか！やった、かーくんかーくん！……
……」

「いいのか？」
ほくほく顔で帰っていったリーゼさんを見送ったカーグは、やおらに聞いてくる。
因みに、リーゼさんはカーグの奴と一緒に来ていた騎士の人が連れて行った。
「大丈夫だろ」
「大丈夫って、お前」
訝しげにこちらを見るカーグ。
そんなに睨むな。
理由はちゃんとある。

「彼女、あんなにデカイのを持ってたろ。なのに重心が全くぶれてない」

「……」

「これでも、実際の刀剣を扱った事が有るんだ。武芸に関してはからっきしだけど、それくらいは分かる」

そう、彼女の技量が卓越しているであろう事。

「それに、随分持ち方が様になってた。多分、普段から斧とかそういったの振り回してるんだろ？」

華奢な見た目からは想像は出来ないが、間違っていない筈だ。
彼女なら使い熟せるだろう。
全ては、彼女次第だ。
信念をもって鍛つが、それは鍛つ時の話。
自分の価値観や論理を相手に押し付ける気はないさ。

「……そうだな」

「さて、お前もさっさと帰りな。まだ仕事中だろ？」

「待て」

クールに締めて、さて次の来客はあるのかと思考を巡らせる、前

に肩を掴まれた。
「なんだ？帰らないのか？」
「折角だ俺も一つ貰おう」
「ん？じゃ、そこらから持って「出せ」……」
「はぁ？剣ならもう店に出てるだろう」
「出せ」
「……」
「……」
だっ
ガシッ
「なん、だと？」
エディナはとうそうをはかった。
しかし、エディナはまわりこまれてしまった！
「造ったよな」
「なにがだ、つーか……」
「とぼけるな。お前がこんな普通の物ばかり鍛つ筈がない」

「な、なぁーんのことかな？えでぃなさんわかんなーい」

ミシリっ

「うぎゃー！やめ、っだ、なにも隠してなんか、あだだだだあ！？分かった、出すからだしますからぁー！？」

「分かれば良い。早く持って来い」

「うぅ、このやろお、覚えてやがれ……」

折角美人さんな顔が歪んだらどうしてくれる。

ふんっ、こんな奴にアレを出すものか。

暴力には屈しない！

奥からフツーの初心者用両刃剣を一本引っぱりだしてカウンターに置く。

「……」

カーグの奴の眼が細まる。

はて、俺はただ剣を出しただけだ。

なにも疑問に思うところなどない筈だ。

どんな剣とは聞いていないしな。

「……」

「これでも外に出る事があってな、その際には発見された貴重な鉱石が手に入ったりしてな」

ぴくっ

「それで、偶々その発掘に携わった者と知り合いだったりして、もしかしたら普段の礼をかねて。なんて事があるかもしれないな」

ぴくぴくっ

「そうか、残念だな。折角店を開いたばかりの鍛治士が材料調達出来ないだろうと親切にも助けてやろうとしたのだが。どうやらいらない世話だったようだ。仕方がない、馴染みの店に卸して少し贅沢な飯でも食うとするかな」

こ、こいつ……！

いけしゃあしゃと、これ見よがしに肩を竦めやがる。

落ち着け、落ち着くんだ。

これは罠だ。

「そうか、仕方ないな。いや、すまなかった。忘れてくれ、手持ちの純度の高い王鉄で支払おうなんて魂胆だった俺が悪かったんだ。そんなFクラス程度の材料なんかじゃ釣り合わないよな」

「Fクラスだと！あっ……」

「どうかしたか？品質事態は良いが、こんな物は何処にでもころがっている。珍しくもないだろう？」

Fクラス。

ゲーム内での最低ランク。

ただし、コレは純度が低い物の話。

高純度のFクラスの材料は、極めてレアであり一部の鍛治士の間

では最高ランクであるＳＳクラスの鉱石よりも価値がある。
クラスの規格が変わっていないのであれば、仕組みが一緒であれば。

「……」

ちらりと、奴の手元を見遣る。
一見なんの変哲もなさそうな鉄鋼の固まり。
だが、俺の予想通りの代物であればそれは。

「……」

無害そうな、爽やかな笑みを浮かべ首を傾げるカーグ。
この、極悪人が！

「あー、はいはいはいはいはい！分かりましたよ、鍛ちますよ。造りますよ。やりゃいいんだろ！！」

「そうか！頼まれてくれるか！」

あっ、やべ。
ハメラレタ、と思った時既に遅し。

「これも一緒に使え、純度で言えばそれに負けない」

あれよあれよという間に鞘ごと腰の剣を抜き取り、鉱石のインゴットと共にカウンターに置かれる。
呆気に取られた俺はなにも反応できない。

「期待している。頼んだ」

「お、おい……ってもう居ねえし」
用はすんだとばかりに、早々に去って行くカーグ。
「……ちっ」
残された俺は、カウンターに置かれた剣を鞘から抜く。
一目で分かる。
使い込まれて尚、美しさと力強さを失っていない剣身。
拵えもなじませたかのように手の形に歪んでいる。
只稽古のみしかして来なかった騎士が持つ剣ではない。
有象無象の冒険者が持てる剣でもない。
そんなものと、鉱石のインゴット。
これは、そういう事なのだろう。
頭を抱える。
「俺はまだ新米だぞ……」

一週間後。
俺は開店から二日目の店支度をしていた。

結局、開店初日は客が二人だけというスタートだった。

「憂鬱だ……」

そして今日が二日目。

何故二日目なのかといえば、間違いなくどこかの誰かさんのせいだ。

「失礼」

「……」

元凶が来た。

変わらず、実践的なプレートアーマーを着込んだ騎士。

無駄に清涼感のある佇まい。

訪ねて来た厄介（カーグ）事に溜め息をはいた俺は、布を巻き付けた物を工房から持ってくる。

「……」

カウンターに置き、丁寧に布を開く。

現れたのは一振りの剣。

あの時渡された王鉄を使い新たに鍛え上げた剣である。

一見形等あまり変わりないが、所々に変化が見られる。

剣身は陶器の如く白く、鍔から切っ先に沿った黒鉄色の刃紋が白さを引き立たせる。

元々少なかった装飾はさらに限られ、鍔にのみほんの少し施されているのみ。

それでも、剣本来の質を落とす事なく。むしろ洗練された美しさ

を称えていた。
この一週間、昼夜問わず鍛ち続けた末の成果だ。
「これが俺の」
「そうだ」
食い入るように剣を見るカーグ。
どうやら造り自体に問題はないようだ。
「試し切り、出来るか？」
「こっちだ」
連れて来たのは店の裏、試し切り用の小さな庭。
有るのは切る対象のみのシンプルな空間。
「おい、これ」
「良いから。やってみろ」
「……本気か？」
「本気だ」
正面から来る疑いの視線を黙殺する。
冗談ではないと理解し、眼を閉じて集中するカーグ。
瞬間、雰囲気が戦闘さながらのそれに変わる。
既にやつはこちらを認識していない。
王城騎士というのは伊達ではないようだ。

「覇っ！」

一閃。

風切り音と共に、重い物がずれる音が聞こえる。

やがて自重を支えきれなくなったそれは落下し地面にへこみをつくる。

そう、眼の前に在るのは普段使われる巻き藁ではなく、金剛鉄だった。

しかも、フルプレートアーマー状で3倍の厚さのをだ。

それを易々と切り裂いたのだ。

もう、すっぱりと。金属がかち鳴らす音さえ聞こえなかったくらいに真っ二つだった。

切った本人ですらあまりの切れ味に呆然とする始末。

一方俺は、こっそりと安堵した。

どうやら、大丈夫そうだ。

「どうだ？」

「なんだ、これは……」

「当社比5倍は固いな。これならドラゴンだろうと切り飛ばせるだろ」

「とんでもない、な」

ドラゴン自体見た事もないし、誇張した虚言であるが。

それぐらいの逸品に仕上げた自負はある。

「渾身の一振りだ。苦労させられた価値は有る」

「なんというか……な」

「まぁ、やりすぎた自覚はある。後悔は微塵もしていないがな！」

「しかし、良いのか？頼んだ俺が言うのもなんだが、本当に俺が貰っても」

「元々お前の剣を加工したんだから当然だろ」

「だが、お前は「ストップだ」……」

「確かに俺はお前には鍛たなかった」

ただの人殺し（ＰＫ）にはな。

「だが、今のお前なら構わないと思っただけだ。それに」

そこで言葉を止め、一つ息をつく。

「借りを作ったままは性分に合わん。これで、チャラだ」

驚きに眼を見開くカーグ。

「気付いていたのか」

そう、いかにセリス嬢が顔が広いにしてもあんなにとんとん拍子にいく訳がない。
後で分かった事だが、こいつが裏で糸を引いていたのだ。
いくらなんでも初めから適正より安い価格でどこも仕事をやってくれるなんて、普通に考えればあり得ない。この街の人々が皆良心的である事を差し引いてもだ。
となれば、予め交渉事が終わっていたと見るのが自然である。
そしてそんな事が出来るぐらいに地位を持ち、知己もあり、俺の事を知っている者なんて。

「ありがとう。貴方のお蔭で俺は店を始める事が出来た。この世界で鍛冶士となれた」

こいつくらいしかいないだろ。
ここまでされて感謝が出来ない程人間が腐っていない。
故に、不肖だが、今この瞬間だけは過去の諍い等全てをぶん投げる。
いつの間にか、馬鹿みたいなお人好しになっていた。
カーグ　ファティマに最大の敬意と尊敬、感謝を持って頭を下げる。

第１１話：エディナさんのお仕事７（後書き）

再び深夜投稿。
やはりこの時間は落ち着きますね。

あるぇー？
いつの間にか、カーグくんが主人公っぽくなってます。
これだからイケメンは油断ならない……。
どうしてこうなったのやら、書いていく内にこんな結果に。
物語を書く醍醐味でも有りますけどね。

さて、この辺りで初仕事編は終わりです。
色々と伏線回収したりと次章に向けていきますよー。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9397t/

おいでませ、ねとげの世界へ。

2011年7月17日12時53分発行